

逸はアフリカに於て植民地を有し、千八百九十六年六月、其の阿フリカ加保護地内に於ける保護軍隊の法律を規定せり。

是れに對して、北アフリカの佛領アルジェリヤ植民地は、英軍を援けて獨軍を撃破する事となり。大戦勃發後、各植民地は皆戰亂状態に陥りしも、アフリカに於ける交戦列國の衝突尤も大なりき。蓋し、アフリカは全然列國の植民地界にして、互ひに境を接せるが故に、一度び母國に戰亂起るや、其の植民地界にも衝突の起るは當然にして、其結果、獨逸はアフリカに於ける其の植民地を悉く失ふ事となり。初め、開戦後間もなく、英佛の聯合植民軍は、佛領アフリカと、英領黄金海岸との中間に位するギニヤ灣沿岸の獨領トーゴランドに向つて進撃し、八月二十一日之を占領せり。其後、千九百十五年五六月の頃、カメルンの獨領も英軍の爲めに占領せられ終りぬ。又佛蘭西と白耳義との植民地聯合軍は、千九百十五年三月十九日に獨逸領コンゴのモルンダを占領し、越えて六月二十九日には、同ノールデレを占領せり。是等植民地戰は、聯合國側にあつて、容易に成功を收めしも、唯だ西南アフリカの獨領地戰に於て、英軍は頗る苦戰に陥れり。一時和蘭人の反亂などありしも、此の反亂は一ヶ月餘りにして鎮定せられ、ポータ將軍

の征討軍亦功を奏して、千九百十五年七月、獨領西南アフリカは全く英軍の占領する處となれり。

又東阿に於ては、獨軍は、同地方の商業中心にして、ウガンダ鐵道の終點に當るモンバサを占領せんと企てたる爲め、英國植民軍は之に抗戦し、十ヶ月の苦闘に依り、最後の勝利を得て、獨領東阿の地全部を占領せり。かく、獨逸がアフリカの植民地全部を失へる事は、歐州の戰局に取つて何等影響を及ぼさざりしが如くなれども、其の多年辛苦經營せる廣大なる地積の植民地を失へる事、獨帝に取つて遺憾の極みなりしならん。

### 列國植民政策の成功

這次大戰の當初に於て、一部識者は、交戦各國の植民軍が、果たして如何なる程度迄母國を援助すべきかに就きて種々の推斷を下せり。然るに之を實際の經過に徴すれば、此の問題は極めて容易に解決せられ、植民地軍は、人種の相違、黨派の異同を一掃して、衆心一致、母國の難に赴ける事、異數の現象なりき。就中、此の愛國的精神を最も顯著に發揚せるは、英國植民地にし



て、殊に、印度、濠洲、加奈陀は其の最たるものなりき。かくして印度人の英本國に對する盡忠の精神は、やがて印度の遠征軍の派遣となり大功績を立つるに至れるなりき。更に英領加奈陀も、印度に劣らず英本國に忠節を盡せり。加奈陀の前首相ウィルフリード・ローリエ氏は開戦當日、其の議會に臨んで演説して曰く、「英國の戦ふ時は、是れ加奈陀の戦ふ時なり」と。斯くて加奈陀議會は、五千萬弗の軍事費支出を決議し、次いで徴兵に着手せしに、忽ちにして三萬人以上を得たり。又英領濠洲に於ても、開戦と同時に、直ちに常備陸兵を送りて聯合軍に参加せしめ、或ひは埃及の防備に力を添へ、或ひは獨領阿弗利加植民地の占領に助勢せり。殊にダーダネルス戦には濠洲軍尤も奮戦せり。其他濠洲艦隊は、専ら自國沿海を警戒して、當時行衛不明と傳へられたる獨逸艦隊の搜索に従事せり。かくして、其の巡洋艦シドニーが、一時南洋方面に暴威を振へる獨逸軍艦エムデンを撃沈せるが如きは、特筆に値ひするものなり。其の詳細は後段詳述すべし。

斯く、植民地軍が、母國の爲に忠誠を勵めるは、嘗に英國のみならず、佛國植民地、白耳義植民地並びに獨逸植民地等に於ても、各自其の母國の爲めに應分の援助を爲せり。獨逸が、内心英

領植民地の背叛を豫期して、是れを身方の利益の中に數へたる事、是れが爲めに一大誤算となり終れり。されば、植民地は、單なる奴隸に非ず、其の政策宜しきを得るに於ては、國家的統御の下にあつて正當なる任務を負擔するを厭はざるのみならず、進んで其の結合的精神を發揮するものなる事、歐洲列強が、這次大戰に依つて實驗せる處にして、將來の政策上に一大教訓を與へたり。

## 第二十四章 日獨戰爭

### 一部

#### 獨逸と膠州灣

世界大戰は、其の初め、歐洲列國間に起り、我が國は直接之に關係なきが如く見えたるも、一日英國が是れに参加するに及んで、東洋方面にも交戰國の船艦出沒し、我れ亦傍觀しがたき状態となれり。而して、千九百十四年八月七日、英國政府は、我が政府に對し、東洋方面の英國貿易が獨逸艦隊の爲に威嚇せらるゝが故に、之が救護の爲めに、我が助力を得たしとの交渉ありき。



依つて我が日本帝國は、日英同盟の誼に基き、獨逸政府に向つて宣戰を布告するの止むなきに至れり。此に於て、我が政府は、三様の行動を採る事となれり。第一獨逸の東洋に於ける根據地たる膠洲灣を攻略する事。第二、獨逸の東洋艦隊を討滅する事。第三、南洋に於ける獨逸領土を略取することは是れなり。

抑、獨逸が、其初め、膠洲灣を租借地として獲得せるの事情を尋ぬるに、獨逸は、久しく支那に利權を得んとして只管機會を窺ひ、千八百八十二年に、地理學者リヒトホーフェンを遣はして山東省の内地を探検せしめしに、彼れは、膠洲灣の有利なるを報告せり。爾來獨逸當局は、膠洲灣に注目を怠らざりしが、其後千八百九十六年、獨逸東洋艦隊司令長官チルピッツ提督、又も膠洲灣の軍事的調査を行ひ、其の翌年には、更に、キール築港監督官、海軍技師フランチュースに命じて精確なる技術踏査を行はしめ、何れも其の海軍根據地として頗る好適なりとの報告をなせり。然れども、獨逸は、他國の領土を占領すべき口實なく、頻りに焦慮する中、偶々千八百九十七年十一月一日、山東省に於て、二名の獨逸宣教師、支那暴民の爲に殺害せられしかば、獨逸は好機逸すべからずとなし、直に東洋艦隊司令長官フォン・デーデリヒス少將に命じて、十一月十四日、青

島を占領せしめぬ、是れと同時に獨逸政府は駐清公使ハイキング男をして、清國に向つて膠州灣租借の談判を開始せしめたり。同時に三隻の軍艦を東洋に派遣して清國を威嚇せしかば、清國政府は事の急なるに駭き、露國に調停を求めたるも、露國は應ぜざりき。此に於て清國は、遂に獨逸の要求に屈伏し、千八百九十八年三月六日を以て正式の條約を締結し、膠洲灣は其の租借地たるに至れり。

### 東洋平和の脅威

かくて、獨逸は既に膠洲灣を得たるも、之にて満足すべきに非ざるは明かなり。何となれば、其の租借條約には、第一章に於て、租借地の境界、權限及び期間を定め、第二章に於て、膠洲灣より濟南と山東省の境に至る線路及び膠州灣より沂州を経て濟南に至る線路の二鐵道布設權並びに兩鐵道沿線左右各三十里の鑛山採掘權を得、第三章にては、山東省内に於ける獨逸人以外の投資を排し、獨逸資本家の優先權を認めしめ、以て山東省を自國の勢力範圍内に收め、且つ進んで、深く支那内地に及ばんとするの素地を作れり。されば、獨逸は、一旦膠州灣租借に成功す



るや、直に獨支兩國人の接近を圖るべき連鎖點として、租借地の經營に着手し、又其の東洋艦隊の根據地として、將た對支政策實現の門戶として、青島に新代式の設備を爲せり。同時に、支那内地と連接すべき背後の鐵道布設を急ぎ、山東省内地の開發を圖り、爾後進んで山東に局限せられたる勢力を更に直隸、河南、江蘇等深く内地に及ぼさんとするの情勢を作り成せり。其の志の那邊に在るやは問はずして明かなり。此の如きは、東洋の平和に取つて、將た我が國の安固に取つて、尤も戒心すべき現象たりき。

元來、我が國は、學術、兵制共に獨逸を師とし、國民個人間に於ても、師友たるの關係深しと見なされたり。然るに、日清戰爭の終局談判に際し、突然、掌を反すが如く、己れ主動者となり、露佛と携へて我れに干渉を爲せり。是れ我が國に於て尤も意外とせる處にして、舉國痛憤措かざりし處とす。而して獨逸が、我に干渉するに當り、日本が支那大陸に領土を有するは、東洋平和の爲に危険なりと唱へたる舌の根未だ乾かざるに、其の翌々年には、自ら膠洲灣に其の巨手を投じて、之が租借條約を完了せるなりき。此の如きは東洋平和に取つて尤も不安を感ぜしむるものにして、其の不法暴戾言語に絶せり。而も獨逸皇帝は、其後、國人畫工メンツェルに命じて、日本の東洋に於ける發展を戒告すべき諷刺畫を作らしめ、黃禍なる語を案出して、日本の勃興は、世界共同の敵なるが如く吹聴せり。此の如きは日本國民に取つて最も不快の言動たり。加ふるに獨逸は其後久しからずして南洋に進出し、カロリン、マリヤナ兩群島を占領し、時に我が南側を制する形勢を示せる事、傍若無人の振舞にして、我が朝野の憤恨を買ふ事甚だしかりき。

### 日英同盟の義に據る

獨逸の膠州灣占領後十九年にして、千九百十四年八月世界大戰起り、我が帝國政府は、八月一日以來、英國と協議する處ありしが、應て露獨間開戦布告となり、事態重大となりしを以て、我が帝國は英國亦戰渦に投じて、日英條約の目的或は危殆に類すべきを思ひ、然る場合、帝國は協約上の義務として必要の措置を取るに至るべきを信じ、依つて、八月四日、帝國の方針を中外に宣明して曰く、「大日本帝國政府は、歐洲最近の政局に對し、憂慮禁ずる能はざるものあり。我が切に希ふ處は、歐洲の紛議速かに解決を告げて、平和の克復を見るに在り。唯だ不幸にして現時の戦局永續するに於ては、帝國政府は右戦局面の現在以外の地に波及せざらん事を希望すると共



に、我れは嚴正中立の態度を確守せん事を期す。然りと雖も、時局今後の轉變に就いては最も細心の注意を要するものあり。萬一英國にして戦争渦中に投ずるに至り、且つ日英協約の目的或は危殆に類する場合には、日本は協約上の義務として必要なる措置を執るに至る事あるべし。此の如き時期の遂に到着すべきや否やは、今日固より豫言し得ざる所なるのみならず、帝國政府は、斯かる場合の發生せざる事を切に希ふものなりと雖も、政府は諸般の情勢に對し、現に慎重なる注意を加へつゝあり」と。

然るに、其後東亞の海面には、獨逸艦艇頻りに出没し、英國の海上貿易甚だ不安に陥ると共に、我國の海上商業亦障害を受くる事少からず。加之、獨逸の極東租借地たる膠洲灣に於ては、日夜戦備を修むるに汲々たり。同地を以て獨逸の東亞に於ける作戦の根據地と爲すが如く、爲めに極東平和の維持甚だ憂慮すべき状態となれり。八月七日に至り、英國は、我が帝國に向ひ、日英同盟協約に基き、其の海軍を以て相當の援助を與へられたしと要求し來れり。

此に於て我が帝國は、英國援助の爲、斷乎たる處置を執るに決せり。蓋し、日英同盟協約は、東亞全局の平和を確保する事、支那の獨立と領土の保全、同國に於ける機會均等の主義を確實にする事及び東亞に於ける日英兩締盟國の領土を保持し、其の特殊利益の一なりとする通商貿易の絶えず威嚇を受くるに當り、相當の援助を供せん事を請求せられたる以上、該同盟を外交の樞軸とせる帝國に於ては、固より其の要求に應じて相當の力を致さざる可らざるのみならず、動もすれば、日英同盟と利害を異にする獨逸が、其の勢力の根據地を極東の一角に有する事は、常に東亞の平和に障害たるのみならず、又實に前述の如く、帝國の利益に背反するものと認めたる爲めなり。此に於て、帝國は、英國に對して我が決意を告げ、爾來兩國政府間隔意なき協商意見の交換を爲したる後、唯海軍のみを以てする一部分行動に止まらず、一般軍事行動を執るに決せり。越えて十三日、英國政府は我れに通告して曰く、「我が政府は東亞陸軍將官に對し、軍事行動に關しては、貴國官憲と協議すべき訓令を發せり。故に貴國に於ても、同様の措置に出でられん事を望む」と。次で翌十四日には、英國陸軍大臣元帥キチナーより、我陸軍大臣、中將岡市之助に宛て、「英國陸軍が、勇敢なる貴軍と行動を共にするは光榮とする處なり」との電報あり。斯くして兩國間の意見大體一致し、遂に同盟協約の豫期する全般の利益を防護せんが爲め、東洋に於ける兩國軍は、獨軍に對し協同作戰を起すに至れり。



我が政府、獨逸と斷交す

而も、此間、我が帝國政府は、尙ほ、平和の手段を以て、其の目的を達せん事を望み、八月十五日誠意を以て獨逸政府に勸告して曰く、帝國政府は、現下の狀勢に於て、極東の平和を紊亂すべき原因を除去し、日英同盟協約の豫期せる全般の利益を防護するの措置を講ずるは、該協約の目的とする東亞の平和を永遠に確保するが爲めに極めて緊要なる事たるを思ひ、茲に誠意を以て、獨逸帝國政府に勸告するに、同政府に於て左記二項を實行せられん事を以てせり。第一、日本及び支那海洋方面より、獨逸帝國艦艇の即時退去する事。退去する能はざるものは、直ちに其の武装を解除する事。第二、獨逸帝國政府は、膠州灣租借地全部を支那に還附するの目的を以て、千九百十四年九月十五日を限り、無償無條件にて、日本帝國官憲に交付する事。日本帝國政府に於て、叙上の勸告に對し、千九百十四年八月二十三日正午迄に、無條件に應諾する旨、獨逸政府よりの回答を受領せざる時は、帝國政府は其の必要と認むる行動を執るべき事を聲明す」と。

然るに、其後、青島に於ては、着々戦備を整へ、同地に在りし日本人に退去を命ずるなど、對敵行爲顯然たるものありしのみならず、所定の期日即ち八月二十三日正午に至るも、何等回答なかりしかば、八月廿三日午後、我れは獨逸に對して左記の如く宣戦せり。

「天祐を保全し、萬世一系の皇祚を踐める大日本帝國皇帝は、忠實勇武なる汝有衆に示す。朕が茲に獨逸國に對して戰を宣す。朕が陸海軍は、宜しく力を極めて戰鬪の事に従ふべく、朕が百僚有司は、宜しく職務に率殉して軍國の目的を達するに勵むべし。凡そ國際條規の範圍に於て一切の手段を盡し、必ず遺算なからん事を期せよ。朕は深く現時歐洲戰亂の殃禍を憂ひ、専ら局外中立を恪守し、以て東洋の平和を保持するを念とせり。此時に方り、獨逸國の行動は、遂に朕の同盟國たる大不列顛國をして戦端を開くの已むなきに至らしめ、其の租借地たる膠州灣に於ても亦、日夜戦備を修め、其の艦艇荐りに東亞の海洋に出没して、帝國及び與國の通商貿易爲めに威壓を受け、極東の平和は、正に危殆に瀕せり。是に於て朕の政府と大不列顛皇帝陛下の政府とは、相互隔意なき協議を遂げ、兩國政府は、同盟協約の豫期せる全般の利益を防護するが爲に必要なる措置を執るに一致したり。朕は此目的を達せんとするに當り、尙ほ努めて



平和の手段を盡さん事を欲し、先づ朕の政府をして誠意を以て獨逸帝國政府に勸告する處ありしめたり。然れども所定の期日に及ぶも、朕の政府は遂に其の應諾の回牒を得るに至らず。朕皇祚を踐みて未だ幾くならず、且今尙ほ皇妣の喪に居れり。恒に平和に眷々たるを以てして、而も竟に戰を宣するの止むを得ざるに至る。朕深く之を憾とす。朕は汝有衆の忠實勇武に倚賴し、速に平和を克復し、以て帝國の光榮を宣揚せん事を期す。」

かくして我帝國は斷然獨逸を敵として戰ふ事となりしが、更に、獨逸の與國たる埃匈國に對しては如何に處置すべきやの問題起れり。元來埃匈國は、東洋に於て我帝國との關係甚だ薄く、今次の大戦亂は、其の源を埃地利とセルギヤの紛議に發せりとは言へ、我が帝國は該紛議とは毫も關係なきが故に、埃匈國に對しては、成るべく、平和關係を持続すべきの希望を有せり。然るに、埃匈國に於ても、亦我れとの葛藤を避けんとの意志なりしが如く、現に日獨間に戰端開かれんとするに當り、埃匈國政府は、自國軍艦カイゼリン・エリザベトが目下東洋に在りて、或ひは日獨間紛議の題目となるべき虞れあるを我れに通告し、該軍艦をば、中立港たる上海に廻航し、日獨間に交戰状態繼續する間、其の武裝を解除して、其儘上海に繫留すべく、之が爲めに

は、膠州灣より上海に至る航路の安全を保證せん事を我が政府に要求し來れり。我が政府は此の要求を理ありと認めしも、當時英國軍艦は、既に我艦隊司令官の指揮下に在りて海洋に行動中なりしを以て、先づ英國政府に此事を圖れり。英國にては、我が提議に對し、或る條件の下に埃匈國政府の要求に應ずるに異議なしと回答し來れり。依つて我が政府は、埃匈國大使に向ひ、右の旨通牒せんとする際、二十七日、同大使は突如、本國政府の訓令なりとて、旅券交付を請求し來れり。事ここに至りては、我が政府も右の請求を拒むべき理由なく、旅券を交付すると同時に、在埃帝國大使に對し、同國を引上ぐべきの訓電を與へ、茲に日獨外交關係の斷絶を見る事となれり。

歐米諸國の我れに對する態度

尙ほ日獨開戰時に於て我れに對する列國の態度を検するに、先づ、是を當の支那政府より見れば、同政府にては、初め歐洲戰爭の勃發するや、其餘波東洋にも及ぶべきを慮り、八月初旬、早くも局外中立を宣言し、以て自國領土内に戰爭の發生せざらん事を希へり。同時に、支那



は、其領内に何等かの活動を起すべき可能性を有する者は日本と米國なりとの見地より、特に我が日本が、此の機會に對支那積極的政策を行ふに非ずやと憂懼し、俄に、我れに親近の態度を裝ふ事となれり。其の後我が國が日英同盟の義に因り、愈々對獨最後の通牒を發するに及び、支那民間には、是れ日本が獨逸に取つて代り、自ら北支那の霸權を握らんとする野心に出づとなし、論難する者ありしも、北京言論界の大部は、支那官邊の命を受けたりと覺ぼしく、皆我國の要求を至當なりと論じ、青島を支那に還附すべき日本の宣言が、他日必ず實行せらるゝを切望するの意を洩らせり。

次に米國の態度如何と見るに、當時米國の言論界は、日本の對獨宣戰に就いて一般に同情を有せざるが如く、或ひは日本軍が、青島以外、特に南洋方面にも手をのばすに非ずやと疑懼せる様子なりき。然れども、青島を支那に還附すべき日本の聲明は、多小此の惡感情を緩和せるが如く、一部の人士は、之によりて、米國が此の戰爭に惹き入れらるゝ虞れなきに至れりと喜べり。但し在米の獨逸人及び獨逸系の米人は、此機會を利用して一般の排獨熱を排英、排日熱に轉せんと圖り、排日運動を盛んならしむるに力を致せり。民間の態度此の如くなるも、米國官憲にて

は、概ね冷靜の態度を持し、國民に諭すに、「合衆國民は、歐亞の戰亂に對して冷靜なる判斷を爲し、自ら抑制して從來把持し來れる不偏不黨なる世界の調停者たる地位を失はざらん事」を以てせり。而して我が帝國の對獨最後通牒を發するを見るに及んで、米國は「日本は嚴に英國との同盟により、極東平和の維持を念とするの主旨に對し、我が米國は之を諒とす」と聲明し、更に日獨開戰に至るや、八月廿五日中立を宣言せり。尙ほ開戰當時、米國は亞細亞方面。即ちフィリピンに約一萬の陸軍を有し、又北支那に約一千の陸兵を駐屯せしめ、且つ亞細亞艦隊を有せり。

## 第二十五章 青島陷落、南洋獨領占領

### 青島の防備

次に青島戰に於ける日獨兩軍の防備は、嚴に秘密に附せられ、海泊河以南の地域にては撮影を禁じ、又グーベルスマン丘以外の高地に登る事を嚴禁せり。而して防備を施せる諸高地は皆松樹其他の常綠樹を植ゑ付けたれば、外部より其の詳細を窺知する事困難なりき。元來青島市街



東北側の諸高地は、岩石質なるも、植林の結果、満山三四尺の松樹を以て蔽はれ、且つ其の斜面は傾斜急峻にして登攀容易ならず。而して青島要塞第一防禦線の北方、孤山より浮山に亘る高地は、所々に僅少の松樹あるのみ。浮山は斷崖絶壁の地形にして、それより漸次西方に進むに従ひ、斜面穏かになり、其の北方は概ね廣濶なる展望を有せり。又要塞附近の諸川は、何れも水源近く、山嶺樹木なき故に水量少く、軍隊の運動を妨ぐる事なきも、降雨あれば俄然出水し、水流狂奔して時々徒涉しがたし。されど雨後兩三日にして常態に復すを常とせり。更に交通状態を見れば、青島は唯だ一條の山東鐵道に依りて支那内地と連絡せり。又二條の海底電信ありて、一は上海に、他は芝罘に通ぜり。又青島要塞の本防禦線はイルチス山よりモルトケ山に亘るものにして、此處には三個の永久築城あり。即ち、イルチス、ビスマルク、モルトケ砲臺にして、其の正面延長約五 軒 なり。

青島市街の人口は、軍人以外の者總計五萬五千餘にして、内獨逸人一千九百人、支那人五萬三千餘なりしも、歐洲大戰後、支那人は、戰禍の來らん事を恐れて他へ避難し、日獨開戦時には約二萬に減ぜりと言はる。又獨逸兩國人は軍人を合して約一萬と傳へ、馬匹二千を算せり。而し

て、要塞守備の獨軍は、總員四千九百二十人にして、之を細別すれば、在青島及び北支那駐屯獨逸現役兵三千七百十人、青島に集合せる獨逸在郷軍人一千四百二十四人、國民軍獨逸人百五人なり。又當時軍艦より上陸せる獨逸兩國海兵六百八十一人なりき。次に其の備砲總數約九十五門にして、他に機關砲三十門、機關銃四十七挺ありき。又八月中旬、青島に在りし獨逸兩國海軍は、エムデン、コルモラン、チゲール、イルチス、ヤグアル、エス九十號、ターク、カイゼリン、エリザベットの九隻にして、合計一萬二千五百噸なりき。

日英兩軍の協同進撃

右の如き青島守備の獨軍に對して、我れは、獨立第十八師團を以て青島攻圍軍を編成し、陸軍中將神尾光臣をして之を率ゐしめ、海軍援護の下に山東半島に上陸せしめぬ。尙此際、英國は、協同作戰の目的に添はんが爲め、北支那に駐屯せる本國正規軍一大隊及び印度兵半大隊を我が出征軍に参加せしめたり。此に於て我が攻圍部隊の一部は、大正三年九月二日より、海軍掩護の下に山東半島の北岸、龍口に上陸を開始し、十五日に至りて上陸を完了せり。支那にては是れより



先き、已に龍口、萊州及び膠州灣附近一帶の地を交戦地域と宣し、山東方面に於ける我が軍の作戦に多大の便宜を興へ、龍口上陸に對しても、何等紛紜を醸すに至らざりき。

かくて、我が營口上陸軍は、次第に南下して平度、即墨、膠州等の諸要地を奪ひ、青島背面に肉薄せしが、此時、歐洲の戦局は大いに發展したれば、我が日本軍も速かに青島を攻略して、聯合軍に氣勢を添へんものと、攻圍軍第二期の輸送を開始し、九月十八日より山東半島の勞山灣に上陸を始め、其の二十六日完了せり。爾後勞山灣上陸軍は、龍口上陸軍と連絡を取りて青島背面に迫り、又バーナヂストーン少將の率ゐる英軍も、二十三日勞山灣に上陸して我が軍に協力せり。

### 青島市外天文臺上の白旗

當時、青島守備の獨將ワールデックは、約五萬の精兵を指揮し、孤立無援の苦境に在りながら、尙ほ死守奮闘、以て日夜戦備を修め居たり。此時即墨附近の地に陣容を整へたる我が獨立第十八師團主力は、二十六日より二十八日に亘りて、敵の浮山、孤山、一帶の敵陣地を奪略したれば、獨軍は海泊河左岸に退き、青島要塞本防禦線に據りて、最後の防禦を爲せり。此に於て我攻圍軍

は、十月二十九日より一舉進撃に移り、卅一日天長節の佳節をトして、總攻撃に轉ぜり。かくて彼我兩軍の砲烟天地を蔽ひ、連日砲戦を交へしが、十一月七日に至り、我が第二中央隊は奮進して敵の堡壘を奪ひ、臺東鎮東堡壘をも占領せり。此間に、堀内少將の率ゐる左翼軍も、小堪山堡壘を強襲して之を抜き、又我が右翼軍、淨法寺旅團も、苦戦奮闘して海岸堡壘を陥れ、英軍亦臺東鎮堡壘を拔けり。此に於て、我が軍一齊奮進して、敵の本據たるモルトケ、ビスマルク、イルチス諸砲臺を陥る、事を得たり。獨軍今は敵しがたく、青島市外天文臺上に高く白旗を掲げて降意を示し、要塞全部は、茲に全く日本軍の手に移れり。次て兩軍の全權相會して開城規約を締結し、越えて十一月十六日、日本軍は、盛大なる入城式を行ひ、三ヶ月に亘れる青島攻圍戦は、茲に終りを告げぬ。此役我軍の戦闘員總數二萬九千二百七十二人、死傷一千二百四十五人なり、又獨逸軍は、戦闘員四千九百二十人にして、捕虜として我が國に護送し來たれる者、守將ワールデック以下軍人四千五百六十七人、文官其他百二十二二人なりき。

### 我が艦隊の南洋進撃



日獨陸戰は以上の如くにして終決せるが、次ぎには我が海軍の南洋獨領進撃に付き略述せん。初め獨逸の東洋艦隊の諸艦は、日獨開戦と同時に其の青島根據地を脱出して大洋に出て、頗りに聯合側の交通を妨害しつゝ、無難の地に落延びんと圖れり。但し其の多くは、途中海上に於て悲惨の最期を遂げしも、其中エムデン號のみは、早くも南洋方面に進出し、其海上を横行して聯合國側の通商貿易に危害を加ふる事甚大なりき。依つて我が艦隊は、英佛の艦隊と協力して之を搜索追撃する事となりしが、此方面に向へる我が艦隊の一部は、其傍ら南洋に於ける獨逸領土たるマーシャル群島、マリヤナ群島、カロリン群島を占領せり。是れ千九百十四年十月の事なりき。是等群島中獨逸の設備としては、誰だマーシャル島に貯炭所と無線電信所の設けあるのみなりき。元來是等群島は西班牙領土なりしを、千八百九十九年二月十二日及び同六月三十日の條約に依り、獨逸政府は、我が八百三十萬圓を支出して之を西班牙政府より購入せるなり。爾後十餘年間、獨逸は土人の統治と土地の開拓とに盡力し、以て其の素願たる世界政策の一部を太平洋上に實現し來れるなりき。

前記三群島の人口合せて五萬四千、面積百六十三萬平方哩にして、略ぼ我が神奈川縣の面積と

同じく、又之を人口のみに就いて比較すれば、我が壹岐一島より稍多きに過ぎず。之を以て、南洋の人煙稀薄なる程度も推知するに足る。我が日本にては、一旦之を占領せる後、各島廳所在地に守備隊を置きて之を守れり。近時は等獨領南洋植民地の價値に就て相反する兩説あり。一は、南洋を以て世界の寶庫となし、我が占領地も將來の發展絶大なりと主張し、他は全然是等地方の經營を徒勞なりと論ぜるもの是れなり。されど、兩説共に極端にして當を得ざるが如し。何となれば、右諸島は、地域狭小にして、生産また貧弱なるが故に、是等諸島のみ就て之を經濟的に觀れば、其の價値大なりと言ひがたけれども、若し此の諸島を根據として、廣く太平洋上の植民政策に努力するに於ては、大なる發展を見るに至るべきは明かなり。



## 第五篇 海上戦

### 第一章 列強の海軍情況

#### 獨逸艦隊の蟄伏

這次大戦に於て、陸上戦は、聯合國側最初より頗る苦戦の體なりしも、海上に於ては、世界の海上王たる英國の優越なる艦隊の威力に依り、聯合國側は開戦當初より、疾くも獨逸の海軍を壓迫し得たり。而して英佛の海軍協約に依り、佛國は地中海の警備を分擔し、英國は専ら北海及びドーヴー海峡の守備に當れり。之に加ふるに伊太利の海軍を以てして、聯合國側の海上軍は益々優勢となれり。然るに獨逸の艦隊は、其の力敵しがたきを知つて、敢て戦を求めず、自國の軍港内に蟄伏して大海に出づる事なかりき。英國艦隊は進んで敵艦隊を襲撃せん事を計劃したれども、丁抹の水道狹隘なるに加へて、其の沿岸防備嚴なるが故に容易に之に近づきがたし。此

に於て聯合國側は、陸兵を以て獨逸の陸上背面より其軍港を砲撃し、其の艦隊を外洋に驅逐する計劃を立てたれども、陸上の戦鬪は、常に獨逸側優勢なるが故に、此の策も容易に行はれざりき。かくして双方の海軍は、一決戦を交ふるの機なきに終れり。

斯く、獨逸の海軍は、守勢一方なれば、其の海外殖民地は孤立となりて敵の蹂躪に委し、海上の通商遮断せられ、經濟上大損害を蒙るのみならず、戦争に必要な軍需品も、輸入の途絶え、一層軍事上の困難を加へぬ。此に於て、獨逸は手を拱して此の窮境に沈淪するに堪へず、今は能ふ限り、敵の通商貿易を妨害するの行動を採れり。即ち獨逸艦隊は、キール及びウィルヘルムスハーフェンの軍港に蟄伏し、其水兵を以て二師團を編成して陸戦に参加せしめ、露國のバルチック艦隊に對しては、時に出動して挑戰的態度を取れり。然れども、北海方面の英國艦隊に對しては、唯遁竄是れ事とし、潜水艇を以て敵の商船及び艦艇を撃沈するを唯一の戦術となせり。而して奥國の海軍も亦アドリヤ海に屏息して出てざりき。

#### 海軍戦術の變化



此の大戦時、世界列國の採用せる海戦術は、其の陸戦術と共に、往年の日露戦争より得る處多  
 大なりき。而して、航空機及び潜水艇等の新式武器の發明は、戦術上に一大變化を與へ、殊に、  
 潜水艇の威力に關しては、英國海軍部内にも甚だしく之を重要視する者多く、時には戦艦無用論  
 さへ唱ふる者出づるに至れり。同時に又是等新武器を攻撃して、之を破壊若くは捕獲するの術頻  
 りに案出せられたり。されば潜水艇の價値は、素より重要なるも、尙ほ戦艦の基礎を戦艦に置  
 き、各國競うて大艦主義を採用せり。即ち超弩級艦若しくは弩級戦艦にして、排水二萬噸乃至  
 二萬七千噸の如き巨大なるもの現はれたり。弩級艦即ち巨艦巨砲主義は、日露海戦に鑑み、英  
 國のフィッシャー提督が案出せるものにて、最初に此案に基きて、千九百六年、ポーツマスにて造  
 られしもの即ちドレッドノートなり。斯くの如き新傾向を誘致せるは、艦船に於ける大砲の威力  
 と魚形水雷の有効距離とが、著るしく増大せる爲めにして、艦船が、魚形水雷の攻撃を防がん爲  
 めには、快速力と堅固なる装甲とを要し、且つ多數の巨砲を備へ、遠距離より決戦するを利とす  
 るなり。

又巡洋艦の任務は、特に會戦の爲めの索敵、決勝後の追撃、轉じては水雷艇の援護を司るも

のにして、是れが爲めには、最大速度と十分の戦闘力とを要す。故に近來各國とも、二萬噸乃至  
 三萬噸の大巡洋艦を建造せり。而して水雷艇の目的とする處は、暗夜に乗じて敵艦に水雷を發射  
 するに在り、従つて大海の海戦にも参加し、港内に碇泊せる敵艦襲撃又は港灣封鎖任務にも服す  
 るなり。

潜水艇は一種の水雷艇にして、其の行動最も自由なると共に、艦體破壊の力最も強大なり。其  
 の發射する魚形水雷を受けては、數萬噸の巨艦も敢なく破壊沈没するを常とす。又港灣附近其他  
 の沿海には、敷設水雷ありて、魚形水雷同様、一瞬間にして能く巨艦を轟沈せしむるに足る。是  
 れを従來の例に見れば、海軍の戦術は、如何なる長期の大戦に於ても唯だ一二回にて勝敗決せら  
 る、を常とす。何となれば、海戦の勝敗は陸軍に比して遙かに鮮明にして、敗者は全滅するか若  
 くは再び戦ふの力を失ふかの結果に終る。而して海軍陸軍直接協同して戦ふ場合極めて少く、多  
 くは陸兵の上陸掩護、又は海岸要塞の攻撃に参加するなり。而して海軍の勝敗に依つて陸上の作  
 戦は大なる影響を受くるものとす。例へば海を隔て、戦ふ場合には、海軍先づ出動して敵を撃  
 攘したる後、陸上の攻撃運動開始せらる。斯くして後、其海軍は絶えず自國の陸軍を掩護し、



上陸軍と本國との連絡を安全にするの任を取る。之を這次大戰の實際に徴すれば、英國海軍は攻勢に出て獨逸艦隊は守勢を取れり。而も獨逸は時々隙を窺つて攻勢に出てんとし、バルト海に於ては、獨逸は攻勢を取り、露國は唯だ自港内に蟄伏する他なかりき。且つ又、眞の大海戦は、多く渺茫たる大海上に行はれ、陸戰の如く遮斷掩護物を得る事なし。従つて陸上に於けるが如く、奇策を以て大敵を破る時期しがたく、身方の先頭艦を以て敵の先頭艦を壓し、砲撃以て之を屈伏せしむ。此の點陸戰に在つて總司令部が敵彈の達せざる位置に設けらるゝとは大いに異り、海軍に在つては、其の司令官必ず先頭に在りて他諸艦を麾き、其の身最大危険に暴露せらるゝものとす。

### 潜水艇の威力

潜水艇の發明は、海軍戰術に一大變化を與へたるものにて、我が海軍にても、日露戰役中、多少之を應用せしも、未だ大なる効果を奏する迄には至らざりき。爾來研究大いに進み、這次世界大戰に於ては、潜水艇の活動驚嘆に値するものありき。

我が日本に於て、始めて潜水艇を使用せる時、艇の長さ百尺、幅十二三尺、水面速度十二ノット水中速度七ノット、水雷發射管二門に過ぎざるものなりしも、今次世界大戰に於ては、英國は排水量千噸の潜水艇を備へ、其速度も水面十六ノット、水中十ノットにして、大砲二門、水雷發射管四門を設けたり。而して、當時潜水艇中最も優秀なるものは、水中に在つて二十四時間乃至三十時間を潜行し得べく、水面には三千五百哩、水中八九十哩を續航するものあり。其の效力に關しては、極端なる讚美論者あると共に、又其の效力を極めて小なりと貶する論者もありき。而して潜水艇の最大弱點は、速度の遲緩に在り、若し敵艦に發見せらるゝ時は殆ど撃沈を免れざるものと覺悟せざるべからず。殊に潜水艇の大敵は飛行機にして、今日の飛行機は、六百米乃至千米の高空より、濁水に非ざる限り、水面下四十尺迄物體を透視し得るものとす。

獨逸は英國全島に對し、千九百十五年二月、潜水艇封鎖を行ひ、最初の程は英國の船舶を多く撃沈せしも、數ヶ月後には、其效果豫期に反して甚だしく衰へたり。其を何故といふに、英國にては、ドーヴー海峽二十餘哩の間一面に海中鐵網を張りたれば、之に罹りて獨逸の潜水艇多く沈没せり。依つて獨逸潜水艇はドーヴー海峽通過を斷念し、一層大型の潜水艇を建造し、蘇格蘭の北方を迂廻し、英國の南方海上に脱せり。然れども其の潜水艇は豫期の効果を擧ぐる事能は



ず、僅かに聯合國側の普通船舶を撃沈する位にて、軍艦に對しては思はしき損害を加ふる事能はず、從つて英國全體の海上權に對しては殆んど没交渉の觀ありき。唯だ特例として記録すべきは、開戦後間もなく獨逸のウエッチゲン艇長が、北海を横ぎり、英國海岸に肉薄して、クレシーアジャンクール其他一隻の英巡洋艦を見事に撃沈したる事、大尉ヘラジングが、同じく潜水艇に乗り、獨逸本國より大西洋を経て地中海を過ぎ、コンスタンチノーブルに至る途中、ダーダネルス攻撃中の一英艦を撃沈せる事等なり。

### 列強海上防禦情況

世界に第一位を占むと稱せらる、英國の海軍が、自國沿海の防禦、殊に獨逸に對する北海の設備に於て殆んど間然する處なきは、敢て喋々を要せざるべし。其の軍港としては、ポーツマス、プリマス、ドーバー等あり。而して其海軍の精銳と目せらる、第一艦隊を以て専ら北海に備へ、佛國海軍と協力して獨逸に對抗せり。其の他の艦隊も各地に派遣せられ、大西洋制海權の保護及英佛交通の警備に當る。又其の警備艦隊は、本國の重要諸港を守り、更に地中海防禦根柢をモ一

ルタ島に置きり。

轉じて聯合國側東方の雄たる露國の海軍を見るに、元來露國海軍は、其の領土の廣大なると其の海軍の南北に分離せる爲め、其の艦隊を四個に分離せり。即ちバルチック艦隊、黒海艦隊、東洋艦隊、裏海艦隊是れなり。

更に佛蘭西の海岸防禦は之を五區に分ち、各區に一箇の軍港あり。即ちシエルプール、ブレスト、ロリヤン、ロシユフォル及びツローンの五港なり。又、伊太利には、スペチャ、ナポリ（ネーブルス）、エネチャ（エニス）、タラントーの四海軍區あり。

獨逸の海軍に關しては、前段 其の軍國主義を説ける際に之を述べたれば茲には略せん。唯だ其の同盟たる埃匈國の海軍に就いて略述せんに、元來此國の艦隊は、海岸地帯とドナウ（ダニユーブ）河とに配置せられ、其本營はアドリヤ海に面せるポーラ港に在り。又ダルマチヤ沿岸の防備も能く整へり。這次大戰に際し、若し埃匈國にして、海上に於て伊太利と戦ひを開かんには、小規模なりとも、目覺ましき激戦を見るに至りしならん。又獨逸側の與國たる土耳其の海軍は、ダーダネルス海峡と、ボスボラス（ボスフォラス）海峡との防備を主とせるものなりき。



## 第二章 獨逸戰艦エムデン號の千里横行

### 獨逸極東艦隊の運命

支那山東省の青島を根據とせる獨逸の極東艦隊は、日獨國交斷絶と共に、逸早くも青島を脱出せり。其の中有力なるは、裝甲艦シャルンホルスト號、グナイゼナウ號並びに巡洋艦ニュールンベルヒ等なりき。是等諸艦は、青島を脱出したる後、南洋方面に潛みて、聯合國側の通商貿易を妨害し、且つ劣勢なる聯合國側の諸艦を攻撃せり。されば、我が日本艦隊が進んで青島を封鎖せる折り、同港に残留せる獨逸軍艦は、三等巡洋艦以下九隻に過ぎず、彼の印度洋方面に於て暴威を振ひ、聯合國側の商船を震懾せしめたる巡洋艦エムデン號の如きも、逸早く南方に脱出したる後なりき。

さて青島を脱出せる獨逸軍艦グナイゼナウ、シャルンホルスト、ニュールンベルヒ、ライプツヒ、ドレスデンの五隻は、しばらく南洋方面を漂泊せしが、千九百十四年十一月には、遠く南米智利國のコロネル沖に現はれしに、折しも同海上に英國の一艦隊警羅中とて忽ち之と衝突せり。然るに、英艦隊は大敗して、其巡洋艦モンマスは沈没し、グッド・ホープは火災を起し、グラスゴーはコロネル灣に遁入して獨艦の爲めに封鎖せられたり。

其後、右五隻より成る獨逸艦隊は、十二月七日、南米の南端東側の英領フォークランド島附近に於て、英國艦隊の爲に發見せられて決戦に及びしが、此度は獨艦大敗して、シャルンホルスト、グナイゼナウ、ライプツヒの三隻は撃沈せられ、他の二隻は交戦中遁走せり。然れども、其中ニュールンベルヒは、英艦の追撃を受けて撃沈せられ、獨りドレスデンのみは、虎口を脱れて、久しく智利沖に漂泊せしが、千九百十五年三月十四日、フェルナンデス島附近に於て、英艦の爲めに撃沈せられたり。

### 狂暴艦エムデン號

かくして、青島を根據とせし獨逸の極東艦隊の主力は全滅せしが、茲に特筆すべきは、同艦隊に屬するエムデン號の活動なり。此のエムデン艦長は、大膽敏活を以て聞えたるフォン・ミュラ



一中佐にして、彼れは未だ宣戦布告なき中、即ち七月三十一日、開戦の止みがたきを見越して、急に青島を出發せり。同中佐の目的とする處は、宣戦布告の報に接すると同時に、電光石火の勢ひを以て敵艦を襲撃し、以て開戦劈頭の奇捷を博せんとするに在りき。當時露佛兩國の艦隊が浦鹽斯德港に集合の計畫ありて、上海に碇泊中の露艦アスコルドは同港に歸るべく、又佛艦も同港に向つて解纜の模様なりとの情報に接したれば、エムデン號は之を途に要して撃沈せんと企てたり。依つて先づ、上海長崎間の航路に沿うて進み、次ぎに對馬海峽に向つて北上し、途中、露國義勇艦隊附屬汽船リヤザン號を捕獲し、之を青島に曳き行き、後に之をコルモラントと改稱して假裝巡洋艦となせり。

八月六日早朝、エムデンは再び青島を發して南下せり。彼れは、最初の計畫に差ひて、敵艦奇襲の策成らざりしも、偶然一船を捕獲したれば、愈々第二段の計畫を立て、海上出會ふ處の敵艦を容赦なく撃沈し呉れんと艦員一同勇躍して進めり。當時、青島を脱出せる獨逸の東洋艦隊主力より、エムデンに向つて無線電信來り、マリヤナ群島の北端に位するバガン島に會合せん事を報じたる爲め、エムデンは、八月十二日、同島に至りて會合を遂げ、爾後の作戰を議せりとい

ふ。此のバガン島といふは、絶海の孤島にして、他との交通なく、又船舶の航路にも當らず、青島より千六百八十哩の距離に在り。故に後日獨逸政府自ら之を公表する迄は、世人更に此の會合を知らざりしなり。

さて此の會合に於て、エムデン艦長は、自艦を以て印度洋上の敵國船破壊に従事せん事を提議して他艦と別れ、唯だ給炭船一隻を隨へて印度洋に向へり。之を當時の形勢に見るに、英國の支那艦隊全部は、佛艦と協同して獨逸艦隊の搜索に従事し、又我が日本艦隊並びに露艦隊も近く之に協力するの豫想あり。更に英國の濠洲艦隊之に會する筈なれば、獨逸艦隊は四周敵を受くるの窮境にありき。依つて、其の司令長官は機先を制してエムデンを分遣し、英國の支那艦隊を東洋に牽制し、其際に主力艦隊を以て、濠洲艦隊を撃滅し、再び取つて返してエムデンと合同せんと圖れるなりき。

最初開戦の際、獨逸本國より自國東洋艦隊に訓電ありて、「南洋を経て南米の南端を迂廻し、大西洋に出て、本國に歸航せよ」と命令せり。依つて同艦隊は、其の歸路に、敵艦隊を集中せしめざらんが爲に、英國の濠洲艦隊と支那艦隊との視線を成るべく東洋方面に向はしむるの方針を立



て、乃ちエムデンを印度洋に分遣せるなりき。加ふるに、印度洋は東洋に於ける通商航路の最も殷賑なるものなれば、エムデンは敵國側の通商破壊を其の重大目的となし、能ふべくば、英國の寶庫たる印度を脅かして、印度土民に反亂を起さしめん事も企圖せるなりき。是れ畢竟、エムデン艦長が資性剛膽にして敏捷無比なるが故に、獨立行動を取り、意外の奇功を收めん事を期待せるなりき。

### エムデン 印度洋を蹂躪す

かくてエムデン號は、印度洋に向ひしが、先づベンガル灣に突進して、忽ち英船六隻を撃沈せり。此の事件は英人を震懾せしめ、一時同灣内の貿易は全然杜絶するに至れり。此時、英國司令官は、瓜哇海以西に敵の軍艦なしとなし、有力なる自國艦隊及我が伊吹、筑摩の二艦をも遠く濠洲方面に出動せしめん事を計畫し居たるが、エムデン襲來の報に接して俄に此の計畫を中止せり。

ベンガル灣を蹂躪したる後、エムデンは、東に航して蘭貢を脅かし、再び西航してマドラスを砲撃せり。其結果は、僅かに同港の石油槽を破壊せるに過ぎざりしも、此の遭難後、印度の諸港の人民は戦々兢兢として通商上に大損害を招けり。同方面索敵の任務を取れる英艦ハンブシャーの如きは、近く錫崙島が敵艦の砲撃を蒙るべきを思ひ、我が筑摩艦に其の保護を依頼せる程なりき。

マドラス砲撃の後、エムデンは、悠悠進んでダローア及ボンヂシリー兩港を脅かし、それより南下して錫崙島の西方に進出し、其處にて英國商船四隻を撃沈し、一隻を捕獲せり。其後、エムデンは、一時姿を隠してチャゴス群島に休養し、再び北上して錫崙島の西方に現はれ、又も英船五隻を沈め、一隻を捕獲し、轉じて東航ペナン灣に闖入せり。當時印度洋方面に於て、三本煙突を有するはエムデンのみにして、他國の軍艦は二本若くは四本なりき。故に遠くより一見して直ちに看破せらるゝの不利あり。依つてエムデンは、多數船舶の往來せるロンボック海峡方面航行の際には擬物の煙突を設けて四本となせり、今ペナン港奇襲の際にも、煙突四本なりし爲め、哨戒中の佛艦は、之を英艦と誤認して油断せる處へ、エムデンは慕進して之を撃沈せり。次で港内碇泊中の一露艦も不意を襲はれて敢なく轟沈せり。



ココス電信所を破壊す

ペナン港を存分荒し廻はれる後、エムデンは更に南方に航して、其の十一月九日突然ココス群島のデイレクシオン島に現はれ、陸戦隊を上陸せしめたり。此のデイレクシオン島といふは、海底電信中継局及無線電信局の所在地にして、其の海底線は、バタビヤに至るもの、濠洲のフリーマントルに至るもの及ロッドリクス島を経てマダカスカル島及阿弗利加に至るもの、三線あり。其局員及家族合せて二十九名の外は凡て土民なりき。

されば、島内の局員等は此朝早く四本煙突の軍艦海上に現はれたるを認め、直ちに無線電信にて「怪しき軍艦見ゆ、救助を乞ふ、ココス發」との警報を發し、同時に倫敦と新嘉坡へは有線電信にて、此旨特に急報せり。其中彼の軍艦は接近し、其の一煙突が帆布製の擬物なる事明白に認められ、従つて暴艦エムデンなる事推せられければ、局よりは、再び急電を新嘉坡に發せり。已にしてエムデンの陸戦隊は上陸し、同電信局を占領し、其設備器具を悉く破壊して他へ交通の電線をも切斷せり。

此時、沖合に繋れる本艦エムデンに、烈しく汽笛起り、陸戦隊に向つて急遽歸艦を促せり。陸戦隊員は只事ならじと見て、急に小艇に飛乗り、一直線に本艦目がけて歸航する中、エムデンは疾くも艦首を沖に向け、全速力にて出航せり。忽ち見る、エムデンの檣頭高く戦闘旗翻り、同時に右舷門より砲火の閃めくを陸戦隊員等は、是れ必ず敵の商船を撃沈するならんとて、一斉砲を凝せる刹那、エムデンの後方に五條の水柱高く騰りて敵弾の落下を示せり。陸戦隊員は、茲に始めて敵艦の近くに在るを察したれど、敵の何者なるかは、樹木茂れる島影に遮られて見え、兎角する中、エムデンは、既に數千米の沖合に出て、益々急速力に進航するが故に、陸戦隊員は、如何ともしがたく、再び引返して以前の地點に上陸せり。

エムデンの破滅

此際我が伊吹艦と英艦メルボルン、シドニーの兩艦とは、濠洲軍を載せたる運送船三十八隻を護衛してコロンボに向ひ、九日早曉、ココス群島附近航行中、同島無線電信「怪しき軍艦見ゆ」との警報を傳へたれば、シドニー艦は急に路を轉じて同島へと急行し、九時過ぎ遙かにエムデン



の煤煙を認めたるは、兩艦の距離十五哩の地點なりき。かくて、九時四十分、エムデンは一萬五百碼の距離に於て、第一彈を發したれば、シドニー之に應砲し、エムデンの前煙突を倒し、次で、其前檣を破壊せり。此に於て、エムデンは、水雷發射の接戦を試みんとして、忽ち五千五百碼迄接近し來りしも、シドニーの發射せる諸彈能く命中して、エムデンは後部に火災を起し、次いで第二第三煙突皆射倒され、速力著しく減せり。シドニーは更らに魚雷を發して之を追撃せしかば、エムデン今は敵しがたく、北キーリン島南側の珊瑚礁上に擱座せり。時に午前十一時なりき。

かくして、さしも猛威を振へるエムデンも運命窮まり、其日の午後四時半遂に白旗を掲げぬ。エムデン號が最初印度洋に現はれしより六十六日間、航海九千四百哩、敵の船舶を捕獲撃沈せるもの十九隻、約八萬噸、之を今日の市價に見積れば優に一億圓を超過せり。而して之が爲めに、英國が一時信用を失へる事、又航路の杜絶せる事等、間接の損害を加算すれば、其の聯合國側に與へたる影響は莫大ならん。眇たる一小艦を以てして、神出鬼没、能く偉功を立てたる事、一に其の艦長の大膽、機敏、明察に依れり。尙ほエムデンなる名稱は、獨逸北西部のエムス

河口に在る一海港エムデン市の名に因めるものにして、千九百〇八年五月二十六日、同艦がダシチツヒ造船所に於て進水せし際には、エムデン市長、司會者となり、同艦就役後も、エムデンの消息は常に艦長より同市民に傳へられ、エムデン號が印度洋に於ける奮闘と其の赫々たる功績と共に、エムデン市の名聲も普く世に知らるるに至れり。

### 第三章 エムデンの後身アイシヤ號

#### エムデン殘員ココス島を發す

エムデン號は以上の如くにして破滅を招きたるが、其際、ココス島に取殘されたる陸戰隊員の消息は如何に？ 陸戰隊長ミラケ大尉は、最初エムデンに追つかんとせしも到底力及ばざりしが故に、再び部下と共にココス島に上陸し、島内の英國人を一所に集めて其武器を押し、獨逸國旗を高く掲げて明白に同島占領を宣布し、大尉自らは、島中最高の屋上に登りて海上の戰況を望見せり。其中エムデンは敗走して北方水平線外に姿を没したれば、同隊長は忽ち思案し、「エ



ムデン號破滅せる時は、英國軍艦此島に來りて我等一行を搜索するなるべく、今は一刻も猶豫すべき時に非ず」となし、折から港内に横はれる一隻の帆船アイシャ號に乗じて洋上に乗出せり。此のアイシャ號は、英人等が、バタバヤとの間に食糧運送用に供せるものなりしも、近來は廢船となりて空しく雨露に晒されたるものなりき。此時ミウケ大尉は、敵の追跡を受くるの虞れあれば、行方を眩まさん爲め、「アイシャ號は、アフリカ東岸に向ふ」と揚言して一旦西航せしも、夜半に至り、急に北方に轉じてスマトラ島のバタング港へと向へり。

翌日に至り、船庫の梁材に刻める數字により、此船は九十七噸の小帆船なる事判明し、其の長さ三十米、幅七八米の廢艦を以て際涯知れざる大海に乗出さん事心細き極みなりき。加ふるに、定員數僅か七八名なる船に、一行五十名の多數を載せれば、寢臺ともなく、多くは船庫内に起居する有様にて、第一に困難を來せるは飲料水の缺乏なりき。幸ひにして、出港後四日、即ち十一月十三日に至り、熱帶特有の驟雨來りければ、之をタンクに充たして一同蘇生の思ひをなせり。

### 孤帆海上に漂ふ

十一月廿五日に至り、アイシャは、スマトラ島を發見し、バタング港の口に向ひしも、逆潮に押流されて、二十七日の朝漸く同港に進み入る事を得たり。同港は和蘭領なれば、碇泊中の和蘭驅逐艦リンクス號來りて誰何せり。依つてアイシャは軍艦禮式を行ひしに、リンクス亦た答禮せり。艦長ミュツケは自からリンクス艦に赴き、「海難の爲に飲料水缺乏せるが故に之を補給し、且つ今後に必要な航海準備を整へん爲め、二十四時間の碇泊を望む」と談ぜしに、和蘭艦長は之を諾せり。かくて同日午後、アイシャ號はバタング港に入りしに、折りしも港内には、獨逸の商船三隻避泊し、自國の戦艦の入港と見るや、皆短艇を下してアイシャに近づき、萬歳を連呼して一行を迎へ、煙草、時計、衣服、新聞紙等を贈れり。此の新聞紙とても可なり舊聞に屬するものにて、十月二日迄の記事なりしも、アイシャ艦内には、以前エムデンが、敵船より捕獲せし英字新聞あるのみにて、戦争記事も皆聯合國側に利益ある様書かれ、何れも虚妄甚だしきものなりしに、今久しぶりにて自國の新聞を得、初めて戦況の真相を知り得て満足せり。



然るに此際、和蘭官憲は、アイシャ號を軍艦と認めずして却つて之を捕獲物として處分し、其乗員を抑留すべしと言ひ出せり。艦長ミュツケは之に對して猛烈に抗議し、却つて領事に對して、飲料水、食糧、海圖其他の雜品を要求せり。領事は之を承諾せしも、和蘭政府より特に任命せられ居たる中立掛りは、頻りにバタバヤ政廳と電報を交換し、一々其回答を遵奉して、飽迄アイシャを抑留し、其艦員を拘禁せん事を主張せり。此に於て、諸官衙にても、不安を感じ、アイシャ號にして此儘、出港するに於ては、日本又は英國より面倒なる抗議を申込まれんかと危めり。此際、事件を處理すべき當の責任者は港務長にして、彼れは白耳義人なりしかば、アイシャ艦長が依頼せる物品は、其日午後に至るも送り來らざりき。艦長は頻りに之を催促せしに、夜の七時漸く其一部を送り來れり。其際、中立掛りは同行し來り、バタバヤよりの命なりとて、海圖、水路圖等の供給を拒み、之に依つて暗に艦の出港を抑止せんと計れり。然るにミツケ艦長は元來強情我慢なる男なれば、港務長に向つて勵聲するやう「予は貴下の交付しがたしと稱する物品をば、必ずしも必要とせず、又海圖なくして航海し能はざる事もなし」と。港務長は更に語を發して、「此の附近には到る處、多數の日英巡洋艦監視せるが故に、假令出港すとも、所詮捕獲の運

命を免れざるべし。已にエムデンの殊勳ありて、貴下等の軍人たる本分は十分に盡されたるなり。此上の冒險は中止すとも、誰人か卑怯と言ふものあらんや」と種々勸戒せしも、ミツケ大尉は更に耳を假さず、言下に之を跳ね付けたり。其中糧食は積込まれ、拔錨の準備成れり。此の食糧中には、十頭の生豚さへありしと言へり。かくて午後十時アイシャはバタングを出港し、何處ともなく姿を隠せり。

チヨイシン號に乘替ゆ

かくて二十九日午後三時頃、アイシャがバタング沖に出でたる時、忽ち一小艇全速力にて近づき來り、一個の手靴を甲板に投入し、續いて又一個の荷物を投げ込めり。其狀、艦に同乗を求むる人の體なれば、艦員一同好奇の目を瞠る處へ、獨逸の豫備少尉一人、豫備機關兵曹一人前後して艦に上り來れり。彼等兩人は、是迄バタング港に抑留せられ居たる者にして、今アイシャの後を慕ひ來り、軍務に服せん事をして乞へるなりき。艦長は其特志を感じ、喜び迎へて配下に加へぬ。是にて艦員五十一名となりぬ。



是より約半ヶ月間、アイシャは無事西方へと航せしが、十二月十四日に至り、濃霧の間左舷に當りて一隻の汽船現はれ、敵か身方が分明ならず、一同憂慮せしが、漸く近づき見れば、其は同じく獨逸ロイド會社の汽船チョイシンなりき。該船は久しくバタング港に抑留せられ居たるを、今回アイシャ艦の來たれるを見て、竊に港口を脱して追ひ付けるなり。斯くと知れる兩船の人々は互に狂喜して萬歳を叫び、種々打合せを爲せしが、チョイシンは船體遙かに大にして、且つ新造なれば、今はアイシャの如き廢艦には用なしとて艦員一同チョイシンに乗り移り、アイシャをば、船底に穴を穿ちて海底に沈めぬ。さればアイシャは、其初めチレクシオン島出發以來一ヶ月半の間に、一千七百〇九哩の海上を航破して、今や其任務を終り、悲壯なる最期を遂げたるものなりき。

ホデータに上陸す

新艦チョイシンは、千六百五十七噸、速力十節半にして、戦前、香港暹羅間の航行に當りしが、開戦當時は新嘉坡に碇泊中にして、直ちにエムデンの給炭船に徴發せられしも、石炭發火

の爲めに、バタング港に避難し、其儘抑留せられたるを、今回ミヌケ大尉の後を追ひて其の乗船となれるなりき。是れよりチョイシンは、僅か七節半の速力にて北東の風を利用し、西方に航せしが、當時、伊太利にては、首鼠兩端を持って未だ決せず。従つて英佛の軍艦も伊太利の船舶に對しては好意を表して身方に引入れんと腐心せる折なれば、ミヌケ大尉は、チョイシンを伊太利商船シニール號の如く装はしめて、敵艦を瞞着せんと計れり。

其中、大戦第二年即ち千九百十五年となり、其一月四日、チョイシン號はアフリカの海岸を認め、遂にホデータ港に向へり。當時、ホデータ迄亞刺比亞鐵道開通せりとの報あり。且つ此鐵道は、メッカの聖地參詣用線なるが故に、英國も之が占領を憚り居たる模様あり。又土耳其は獨逸と同盟せる關係にあれば、亞刺比亞國內を通過する事、尤も安全なるべく思はれたり。かくてチョイシンの乗組員は、一月九日ホデータに上陸せしが、同時に、ミヌケ大尉は、チョイシン號を無事本國に歸航せしめんが爲めに、直ちに出港を命じ、其身は陸上より亞刺比亞の地を鐵道によりて本國に歸る事とせり。然るにチョイシンは、其の十三日紅海に入り、伊太利領マッソーワ港にて抑留せられ終りぬ。



一行熱沙の行軍に悩む

さて、ミラケ大尉は部下五十人と共に、陸路亞刺比亞の沙漠を進みしが、豫期せし鐵道は未だ開通せず、土語には通ぜず、加ふるに馴れざる土地とて、忽ち一行中に赤痢患者發生せしかば、暫く靜養し、二十七日、獨帝誕辰の日、午後五時に至りてホデーダを出發せり。かくて、六日を経てイエメンの首府サナーに着せしが、此時一行の八割は熱病に罹り、其の療養に二週間を費せり。是が爲め、流石勇敢なる獨兵等も、此上内地旅行の不可能なるを思ひ、再び引返して、ホデーダ港に立戻り、土耳其政府の斡旋にて、二隻の帆船に分乘し、ホデーダの北方十節のジャバナを出帆せるは、三月十四日の夕方なりき。翌十五日、兩船は夜陰に乘じ、英國の封鎖を突破して北上せしに、三日目に、一船はマルカ島の岩礁に觸れて破壊沈没せり。依つて他の一船は、其の乗員を收容し、翌日同所を發して其夕、クンフダに上陸し、同地の土人より熱誠なる歓迎を受けたり。ミラケ大尉は此處にて約五十四噸の一帆船を得て更に北航し、廿四日リートに着きしが、海路は英國の軍艦ありと聞き、已むなく陸上行軍に決し、依つて百十頭の駱駝より成る隊商を編成し、一名の土耳其憲兵の案内にて、二十八日リートを發し、夜間平均十四時間行軍せり。

然るに、四月一日の早曉、突然三百人餘りの土賊襲來せり。此の地方は、沙丘起伏して四百米以上を展望する事能はず、依つて一行は直ちに駱駝を下り、土賊に向つて銃劍突撃を試みしに、賊は敢なく潰走せり。是れにて土賊の難は免れしも、二日に至り、一行の宿舎に數萬の甲蟲群襲來し、初めの程は足にて踏殺せしも、次第に數を増して、衣服の中に這入り、爲めに息を吐く間もなきに、太陽は灼くが如き熱氣を送りて苦惱堪へがたし。一行の被れる白頭巾は、敵の目標となる虞れある故、之を脱せしに、酷烈なる日光の爲めに頭部を照らされて眩暈を起し、又射撃の際銃身に手を觸るれば、火傷を起す者さへありき。駱駝の鞍迄も灼熱の爲めに燻り出し、其の焦げつく如き臭氣は堪へがたし。一行は砂を以て鞍の燃ゆるを消したるも、沙吹雪烈しくして耳目鼻口に入り、特に目は炎症を起し、顔面の汗に附着せる沙塵は、固まりて層を爲し、面相すら判じがたきに至れり。仰げば、上空には、數十羽の鳶高く輪を描きて物凄く鳴き廻れり。而して、前日メッカの土耳其陣營へ援軍催促の使者を差し立てたるも、未だ何等の消息もなく、飲



料水將に盡きんとせり。今は坐して死を待つのみ形勢となれり。

萬死を脱して家信に接す

斯る處に、四月三日の正午頃、土賊の陣地より白布を振うて進み來たる者あり。ミラケ大尉は之を迎へて接見せしに、彼れは正式の軍使にして、「金貨二萬二千磅を出ださば、軍を撤して去らん」と要求せり。大尉は思ふやう、「彼等土賊は、土耳其の援軍來たるを察し、逸早く償金を獲得して去らんとすの策ならん」と。依つて成るべく此の談判を延引し、援軍の來たるを待つて敵を挾撃せんとし、彼の使者に答ふるやう、「余は沙漠の地に在りて砲聲を聞くを喜ぶ。見よ、彼の桶には十分の水あり、今後四週間は、我等の防戦絶對安全なり」と、空桶を指して示せり。使者は一旦立去りしが、半時間程経て再び來り、前の條件を繰返せり。大尉は成るべく時間を延引せん考へなれば、悠々と之を迎へ、「余は是非汝が首領と會見せん事を欲す。斯かる重大なる談判には、首領自ら來ること好ましけれ」と言放てり。然るに敵の首領は來らず、其の代理者又來りて脅迫して曰く、「若し汝等にして償金を支拂はざるに於ては、我等猛烈なる攻撃を開始すべし」と。

果して敵は猛烈なる一齋射撃を開始せしが、やがて四隣寂として敵は姿を消せり。ミラケ大尉は敵に詭計あらん事を慮かり、輕々しく動かず、日没を待つて敵地を突破せんと議する處へ、忽ち二頭の駱駝に乗じて來る者あり、彼等はメッカ總督の旨を受けて來れる使者にして、「都督は貴下等が土賊の難に遭へるを聞き、只今部下を率ゐて救援に來れり」と告ぐ。果して半時間後には、七十頭の駱駝に乗れる騎士が、一酋長の指揮の下にコーランの章句を金字にて描ける紅の旗を押立て、大鼓に合せて經文を唱へつゝ、進み來れり。大尉一行は始めて蘇生の思ひをなし、それよりは順路、ジエダに出て、其處より船にてエル・ウエヂに向へり。

かくて一行が、エル・ウエヂに着せるは四月二十九日なりしが、此處に滞在する事三日、五月二日の午前、駱駝三百四十頭より成る隊商を編成して同地を發し、其の十日へジャズ鐵道の一驛に達せり。此地は土耳其領なれば、獨逸領事、新聞記者、軍醫其他多數の獨逸人及び土耳其の士官、亞刺比亞酋長等出迎へ、一行は特別列車に乘込みて出發し、五時間の後ダマスカスに着し、此處にて同國人の大歡迎を受けたり。それより鐵路を更に北進し、五月二十三日午後五時、ハイダラバシヤに於けるアナトリー鐵道中央停車場に着し、更に土耳其の驅逐艦に乗じてコンスタン



チノープルの歓迎場へと赴けり。かくして、エムデン陸戦隊一行は、十ヶ月目に始めて家郷の信に接し、歡天喜地、其の辛苦の酬ひられたるを祝せり。此時生残せる一行は士官五人下士七人、卒三十七人合計四十九名なり。

## 第四章 英獨兩艦隊の北海會戰

### 第一回 北海々戰

前條既に獨逸極東艦隊全滅の経路を述べ終りたれば、是れより轉じて歐洲に於ける海戰を叙せんに、曩に大戰勃發後、北海に於ける英國艦隊は、數度ヘリゴランド島附近に移動して獨逸艦隊に挑戦せしも、獨逸艦隊は、其力敵しがたきを思ひて出て來らず。唯だバルト海の露國艦隊に對してのみ、活動の氣勢を示せり。されど、獨逸海軍とても、海上を敵の蹂躪に委するを好まざ、出来るだけ敵を撃射せんとの計畫を立て、其の潜水艇を出して北海に活動せしめたり。かくて千九百十四年十月に至り、獨逸は丁抹と瑞典間の海峡を閉鎖するに決し、ランヂラントベル

ド南方の公海に水雷を布設せり。此に於て英國は、北海全部を交戦區域と認むる旨の布告を發せり。而して十一月中旬には、獨逸の潜水艇は、早くも活動を開始し、翌十五年一月一日には、英の一戰艦は獨逸潜水艇の爲めに撃沈せられたり。

越えて一月廿四日、英國の分艦隊は、北海を巡航中、獨逸の艦隊が、英國の東岸に向け、進行するを發見し、雀躍之を追跡せしに、獨逸艦隊はそれと察して早くも自國沿岸に向け遁走せり。英艦隊は之を急追して獨の裝甲巡洋艦ブリュッヘル一隻を撃沈し、尙ほ戰闘艦及び巡洋艦各隻に多大の損害を加へたり。但し英艦側にも其の一戰闘巡洋艦は大損害を受け、他の一隻は撃沈せられたり。

### 獨艦轟沈の慘狀

然るに、此日の海戰に於ける獨艦轟沈の慘況は同艦より救助せられたる捕虜の言に依りて左の如く傳へらる。

「嚴密に言へば、此の海戰は、一月廿四日（千九百十五年）日曜日の午前九時に始まり、折りし



も、余は警戒當番なりき。時に英艦は十六 軒（我が四里）の遠方に在り、未だ肉眼にて之を認め得ざりしなり。忽ち英の一彈飛び來りて、我が艦側の海中に數十丈の水柱を騰らしめぬ。而も此の水柱が次第に適確となりて我艦に近づきたれば、甲板上の水兵等は妖魔に襲はれたらん如く、茫然として眼を瞪るのみ。乍ち敵の一彈、我が艦首を嘗めんばかりの處に落下して、水柱六十丈の高さに登り、其が爆然甲板に崩れ落ちし時には、大海嘯に遭ひたらん如く、艦體爲に漂蕩せり。

「今や英艦の照準全く定まり、其砲彈は間斷なく我等の眼前に飛來せり。忽ち、一彈我艦に命中して電燈装置を破壊し、爲に艦内大混雜を起せしが、又も一彈來りて上甲板を貫き、下甲板に破裂せり。此に於て下甲板兵員の恐怖混亂名狀すべからず。其中敵彈の照準距離稍短縮せりと思ふ間もなく、今度は彈道水平に近くなり、次で飛來せる一彈は、舷側を貫きて大孔を穿ち、更に甲板へと突き抜けたり。是より敵彈は頻りに命中し、爲めに石炭庫に火災起り、一方又機關庫にも砲彈落下し、油槽破裂して流出せる油は火焰に注がれて燃え擴がれり。されば下甲板に在りし者は暗黒と猛火の爲に度を失ひて叫喚する状態焦熱地獄の光景なり。其間にも敵彈の落下愈々繁

くして、密閉されたる艦内に、敵の巨彈爆發せる爲め、内部の氣壓に異常の變化を起し、膨脹せる空氣は各出入口に及び、脆弱なる箇所より怪しき唸り聲を發して外部に迸出せんとせり。從つて艦内の器物、裝飾など狂風に煽られて散亂し、扉は皆大風時の如く跳ね返り、堅固なる鐵扉迄も吹き曲げられ、乗組員は木の葉の如く吹かれて鐵壁に叩き付けられぬ。されば、直接砲彈の爲めに斃れたる者の外、激烈なる氣壓變化の爲に、無慘の死を遂げたる者少からざりき。

「下甲板の慘狀此の如くなれば、況して上甲板の混雜恐慌は言語に絶せり。今や大小の敵彈甲板に雨下し、殊に巨彈命中の際には、艦は著しく傾斜して搖籃の如く動搖し、水兵等は敵彈の落下する毎に、皆板上に伏して難を免れんとし、砲手は大牛戰死し、甲板の上は死傷者と砲彈の破片とにて狼藉たる慘狀を呈せり。忽ちにして艦體は異様に傾き、早くも沈没せん形に見えたり。同時に慌だしく鐘の音起りて、危急を報せり。此に於て艦員一同甲板に集まりぬ。やがて獨帝萬歳の聲三たび起り、「ラインの守り」の悲壯なる軍歌一齊に唱へられ、艦長は一同に向つて隨意艦を去る事を許せり。此時英國艦隊既に發砲を止め、唯だ頻りに水雷を發射せり。兎角する中、艦體は急に傾斜して顛覆し、巨大なる渦巻を残して沈み行けり、折りしも獨逸の海軍飛行機は、



速かに上空を飛翔して爆弾を投下せしかば、英艦も之を避くるにせはしく、爲めに溺死せんとする獨兵を救ふに由なかりき」と。當時の慘状思ひ見るべし。

#### 獨逸の潜水艇跳梁

第一回北海海戦後、二月上旬に至り、獨逸政府は、英佛間に軍隊及び軍需品の輸送行はる、の實情を探知し、「爾後は、英本國諸島近海は勿論、英佛海峡も交戦地と認むべく、又英國の商船が、中立國旗を掲げ居る事實あるが故に、爾後は中立國船舶に對しても、獨逸は安全を保證しがたし」と通告し、且つ二月十八日より、容赦なく潜水艇攻撃を加ふべきを豫告して、無数の潜水艇を北海に放てるのみならず、重要海面には凡て水雷を布設せり。これが爲め、英國汽船の被害は勿論、他中立諸國の船舶も、悲惨なる撃沈を被るもの多く、米國の船舶さへも屢々大危害を蒙り、遂に米獨間葛藤の端を發せり。

此に於て、英國政府亦決心する處あり、三月に入るや、獨逸沿岸全部封鎖を宣言せしかば、米國は經濟上甚大の打撃を受くる事となり、國際間の物議漸く複雑となれり。されど獨逸は飽迄潜水艇戦を續行するに決し、英國西方の大西洋方面にも其の潜水艇を出動せしめ、五月四日には、愛蘭沿岸に於て、英國の巨船ルシタニヤ號を無警告撃沈せり。

其の初め、海戦に於て、さしたる効果なかるべしと思はれたる潜水艇も、今や獨逸の作戦成功して、普通船舶に對し、惡魔の如き危害を加ふる事となれり。されば、英國ロイド會社汽船中、開戦後十三ヶ月間、即ち千九百十四年八月より翌年八月末日迄に、獨逸潜水艇の爲めに撃沈せられたるもの百三十八隻に及べり。但し其十一月に入りては、獨逸潜水艇の活動も漸次鈍り、却て、英國の潜水艇は、北海に活動して十月十五日には、デンマーク、瑞典間の海上に於て、獨逸驅逐艦一隻を撃沈せり。越えて千九百十六年四月廿五日の曉方、獨逸の一戰闘巡洋艦は、輕巡洋艦並に驅逐艦を伴ひて、突如英國サフオーク州のローストフト沖に現はれ、其の沿岸を砲撃せしが、英艦隊の爲に撃退せられたり。



## 第五章 第二回北海々戦

英艦隊力戦敵を退く

斯く獨逸にては、主として潜水艇戦を試みたる爲め、千九百十五年一月廿四日の北海海戦後約一年半の間、其艦隊は自國軍港内に蟄伏せしも、千九百十六年五月三十日に至り、ゆくりなくも、第二回の海戦を見たり。此日拂曉、獨逸艦隊は、ヘリゴランド島の後方より北海に現はれ、午後三時ユトランド海岸の西方に於て、英國の分艦隊と衝突せり。此時獨逸艦隊は、英國艦隊を認むるや戦を好まず、直ちに方向を轉じて、北方へと退却せり。英國艦隊は其の退路を遮断せんとして、敵の南方進航中偶々濃霧の爲めに、獨逸主力艦隊の所在を認むる事能はずして冒進し、其結果、獨逸兩艦隊の挾撃する處となり、頗る苦戦に陥れり。然るに午後六時に至り、英の主力艦隊到着し、奮進敵艦隊に肉薄せしも、此時早くも、獨逸の飛行船は之を偵知し、身方の艦隊に通告せしかば獨逸艦隊は決戦を避けて退却し、午後九時雙方物別れとなれり。但し英國水雷艇

は、終夜敵艦隊を追撃し、獨逸の水雷艇亦之に對して身方艦隊を掩護し、防戦尤も力めたり。かくて英國艦隊は、獨逸軍港百裡迄追撃し、同時に其水雷艇は遙かにヘリゴランド島を望むに及んで追撃を中止せり。

### 艦内に於ける機關兵の活動状態

海戦の場合、艦内底部に勤務する機關兵の活動状態に就いては、從來多く世上に知られざりき。依つて右北海第二回開戦中、獨逸艦を撃沈せし一英艦乗組機關將校の談を記せん。

「此日余が乗艦は、北海上を巡警し居たるに、忽ち、水平線上、一抹の黒烟見ゆとの報告あり。間もなく、全員部署に就くべきを報ずる信號喇叭、鼓膜を破らんばかりに響けり。それより半時間の後、轟然一發の砲聲起り、艦體は大地震に遭へるが如く震動せり。愈々我艦が火蓋を切れるなり。此時、機關室に備へ付けたる指壓計の電鈴響き來り、機關兵員一同靜まり返つて最後の命令を待てり。

「其時『防水扉を閉鎖せよ』との信號來り、忽ち鐵鎖を捲く音と共に、大鐵扉滑り落ちて戸は鎖



されたり。今ぞ愈々僚友と別るべき時來れりと思へば、機關兵一同流石に何となき不安に襲はれぬ。然れども深く危険を思ふ暇もなく、又もや「第四番爐を焚け」との信號來りて一同忽ち毅然たる態度に復せり。本艦が戦闘に参加するは此日始めての事とて、兵員中には、新兵も交り居たるが故に、内心の疑懼少からねど、彼等は何れも沈着にして、平時演習に臨むが如く行動せり。

「此時、突然第一號焚火室の側面に當りて一大衝動起り、我等は勿ね飛ばされんばかりの震動を感じせり。甲板上の戦闘と異り、我等は艦底に在りて外面の戦況を知る事能はず、隨時起る大音響に膽を奪はれて、爲に任務を離れ、艦の進退自由を失はしむる事なしとせず。されば愈々開戦となるや、古參兵が新兵を激勵するの苦心も一通りならず。

「此時、我が艦は忽ち進行を止め、同時に艦體烈しく動揺して、百雷一時に落つるが如き響きせり。一人の火夫は、敵へのお禮ぞ、身方の發砲なるぞと叫びぬ。此の時焚火の信號來りしかば、彼れはシヤエルにて二杯の石炭を爐へ投げ、悠悠として舊の座に歸りしが、又も敵彈甲板に落下せらるらしく、艦體は大搖れに搖れぬ。機關兵等は唯だ艦橋より來る命令に依つて、略ぼ外面の戦況

を察し得るのみ。而も其の命令を完全に遂行する事は容易ならず。各員此方彼方と急がしく駆け廻る際には、心氣昂奮して全身顫動するを見る。我が艦は今二十五節の速力にて進行を始め、艦橋よりは、「廻轉力を増加せよ」との命あり。舵輪は唸りを生じ、舵の壓力の爲め、艦體烈しく傾きて、甲板上の兵士らは殆んど顛覆せんとす。此の時、「左舷前進全速、右舷後進」の命來りぬ。操舵器具は舵輪の廻轉する毎に激しき爆音を發し、船は殆んど逆轉する程の航路を取り、更に反對の方面に駛れり。こは只事ならじと思ふ間もなく、一人の青年將校は、「敵潜水艇の襲來よ」と叫びしが、其利那、今迄全速力にて航走して居たる我が艦は、俄然進行を停止し、甲板上の轟轟たる砲聲亦歇んで、一瞬時、艦は死せるが如く沈黙せり。されば、艦底の機關兵らは、一同顔を見合せて恐怖の極に達せり、忽ち艦橋より爽かなる電話の聲あり、「敵艦沈没！ 全員甲板に來れ」と叫べり。此の報告に接して、艦底の勇士は雀躍し、石炭と油とに塗れたる機關兵一同、昇降口を開いて甲板に躍り出たり。見渡せば、敵艦は致命傷を負ひて、北海の荒波に其の姿を歿せんとす。甲板上の我が將士は、我等を擁して共に歡聲を揚げ、萬歳を唱へて戦勝を祝せり。我等は感極まつて共に嬉し泣きに泣けり。」



### 兩艦隊の損失比較

弩級艦が戦争に参加せるは、此の第二回北海々戦を以て嚆矢とす。潜水艇及び空中飛行船が、海戦に参加せるも是れを始めとなす。されば此日の戦闘は兩軍全然勝敗を決すべき性質のものに非ざりしも、這次大戦勃發以來の大海戦にして、英國側の損害は、巡洋戦艦三隻、巡洋艦三隻、驅逐艦八隻にして、死傷四千人なり。是れに對し獨逸側の損害は、戦艦二隻、巡洋戦艦二隻、巡洋艦三隻、驅逐艦六隻、潜水艇一隻にして、其の戦死者八百名、行方不明四千六百名、負傷一千四百名と算せらる。又曩に英國海軍が、ドーヴー海峡に鐵網を張りたる以來、獨逸の潜水艇は、地中海に轉じ、かくて英佛海峡は、久しく獨逸の攻撃を免れしも、此頃に至りて又もや同海峡に於ける英商船の獨逸潜水艇に襲はるゝもの頻々たりき。初め、獨逸にては、英國が、ドーヴー、カレール間十七海里とポートルランド、ラヘーグ間約二十五海里の海峡を全部封鎖せるものと思ひ、餘儀なく地中海に其の潜水艇を向はせしものなるに、其の後、英國の鐵網は、ドーヴー海峡のみなる事知られ、獨艦はポートルランド方面より進みて又も猛威を振へるなりき。

## 第六章 バルト海、地中海、黒海、の海戦

### 第一回獨艦隊のリガ灣進攻

轉じて之をバルト海に見るに、同海に於ける露國艦隊は劣弱にして到底獨艦隊の敵に非ざるも、而も機會ある毎に露艦は獨艦を攻撃せり。但し、露艦は其の力敵に及ばざるを熟知せるが故に、自ら進んで獨艦隊に挑戦せざる方針なりき。かくて戦争第二年の夏、即ち、千九百十五年八月八日、獨艦隊は戦艦九隻、巡洋艦十二隻及び多數の驅逐艦と掃海船を伴ひて、突如リガ灣口に現はれたり。此の日天氣清明波靜かにして展望尤も良佳りき。既にして獨艦隊は、灣口防禦面の遙か外方に至り、先づ其の掃海船隊を進めてイルペンスキー海峡の地雷を掃除し始めぬ。斯く見たる露國艦隊は、防禦面の内線に接近し、獨の掃海隊を猛射せしに、獨艦隊は、之に對して遠方より應砲せしも、露艦隊の行動甚だ自由なるに反し、獨逸艦隊は、其附近に凡て地雷布設せられあるを慮かり、自由に行動する能はず、従つて其の掃海隊は一旦退却するの止むなきに至



れり。此時露國側は、水上飛行機を放ちて敵掃海隊の頭上より盛んに爆弾を投下せしかば、獨掃海隊多大の損害を受け、混亂して退却せり。而も獨艦隊は執念く掃海を遂行せんとし、少時の後、又進航し來れり。露艦にては前回の經驗より照尺正確となり、一齊に之を猛射せしかば、獨艦隊は損害を蒙りて退却せり。

#### 獨艦隊再度のリガ灣襲來

斯くして第一回獨逸艦隊リガ灣攻撃は失敗に終りしも、其月十六日、彼等は、再びリガ灣に襲來せり。此の時露國の第一戰線艦隊は皆出て、外洋に在りければ、獨逸艦隊が露艦隊を全くりガ灣に封鎖せんと企ては齟齬せり。依つて獨艦隊はリガ海岸を占領し、海上よりして陸岸の要塞を包圍し、以て致命的打撃を露國に加へんとせり。灣内に留守中の有力なる露國驅逐艦、之に抗して勇敢に戦ひしも、敵艦隊の爲めに次第次第に北部に壓迫せられ、其の陸軍の掩護下に走つて辛く危難を免れたり。其の際、露國の戰艦スラーワ、ツエザレキッチ及び砲艦シューチ、コレートの四隻は、其速力に於て、自國驅逐艦に續行する事叶はずして灣内に残りしに、八月十九日

早朝、身方主力艦隊司令部より「リガ灣を出て、來り會せよ」との命あり。更に無線電話にて、「リガ灣内進航に際し、獨逸艦隊に遭遇すべきが故に、其覺悟を以て十分警戒せよ」との通報ありき。

茲に於て、砲艦シューチ、コレットの二隻は、當日前十一時、兩艦三十間の間隔を取りて進出せしに、日中敵艦の影も認めざりき。然るに同夜八時過ぎ、三煙突の敵艦一隻、全速力にて進行し來り、コレットを遮断せり。かくと見るや、コレットは獨艦御參なれと、砲門を開いて先づ一彈を送りしに、獨艦亦之に應砲し、敵彈物凄く唸つてコレット艦の附近に落下し、數丈の水柱を揚げぬ。時に夜暮く、四顧茫茫、時計は正に九時を報せり。

此時敵艦は、益々コレットに近づき、之を壓迫して同艦の艦首とシューチの艦尾との間に出てんとす。同時に、右方海上にも更に一隻の獨逸驅逐艦現はれたり。獨艦は速力武装共に優り、コレットを砲撃する事次第に猛烈となり、又シューチ艦をも探射し始めぬ。然れども、最初の程、敵艦皆シューチの頭上を掠めて後方海中に没し、巨大なる水柱のみ高く騰りぬ。此間に、コレットは敵艦を猛射し、シューチを後に残して逸早く敵線を突破せり。



露艦シューチ號轟沈の慘況

時に夜は十時に近く、シューチは獨り取残されて、敵の艦列を突破する事能はず、次第に苦戦に陥れり。忽ち獨逸の一巡洋艦は、三百間内迄迫りてシューチを砲撃すれば、獨逸の一驅逐艦亦側面より牽制攻撃に出でければ、海上波穩かなるに拘らず、シューチ艦の周圍のみは、海水滾蕩して、泡沫吹雪の如し。敵彈炸裂するや、耳を聳するの響と共に、海中より火焰を噴起して、水烟を奔騰し、鋼鐵の碎片四方に飛散して物凄し。忽ち一彈甲板を直撃し、シューチの煙突を破壊し、又一彈甲板を貫通して發電機を粉碎し、更に一彈は船橋に命中して之を破壊せり。かくて戰鬪は愈々烈しくなり、シューチの通信機既に破壊されたれば、各砲思ひ／＼急射撃を以て多數の砲彈を敵に送りしに、艦首の五吋砲が發せる一彈は、見事に獨逸の驅逐艇に命中して、艇は忽ち沈没せり。其時敵の發せる一魚雷は、幕地に矢の如く突き來れり。一信號兵之を認めて警告したれば、シューチ艦は急に針路を轉じて之を避けしに、次いで第二の魚雷來りしもシューチは又も見事に轉廻して之を避けぬ。兎角する中、敵の一彈、シューチの甲板上に炸裂して火災を起

したれば、一同之が消防に努むる處へ、忽ち船艙に怪しき爆音聞え、艦の中央部に反曲せる甲板の間隙より夥しく蒸氣の噴出を見たり。是れ汽罐の破裂せるを示せり。

今やシューチ艦の運命は、刻々に切迫し、舷側は破壊し、短艇は微塵に碎かれ、爲めに鋼塊と木片とは甲板上に飛散し、砲彈炸裂の響、凄愴喩へん様もなし。此時獨逸巡洋艦は、榴霰彈を雨と射かけしかば、シューチ艦員の負傷益々多し。獨逸艦は斯くしてシューチ艦員を斃殺し、艦を捕獲せんと企てたるなり。此時シューチの乗員は次第に減じ、甲板上又人影を見ざるに至れり、備砲亦使用に堪へざるもの多くなりしも、艦首艦尾の二砲は、飽迄射撃を繼續し、特に艦尾に在りては、四人の兵士鋼盾の陰に潛みて獨艦を射撃せり。此時艦長は早や是迄と覺悟を定め、一潜水兵に命じてキングストン傘を開かしめたり。此に於て艦は微動を生じて、徐々に沈み行けり。乗員皆甲板に坐し、十字を切りて祈念し、最後のウラーを呼びし時、浸水正に舷上に及べり。百六十五名中、此時迄生存して甲板に在りしは八十人に過ぎず、而も負傷せざるは一人もなかりき。此の時シューチ艦長チェルカリフ中佐は艦員に向ひ「汝等は海中に跳び入りて遁れよ」と訓示し、其の身は自若として艦と共に沈み行けり。依て八十名の兵員は、一齊水中に飛入り、救命囊、木片



などに櫻まりて泳ぎしが、敵の爲めに救助せられたるは四十四人にして、他は悉く溺死を遂げたり。

### 地中海及び黒海に於ける海戦

開戦當初、獨逸地中海隊に屬するゲーベン及びブレスラウの二艦は、ダーダネルス海峡に遁入せしが、英佛兩國の抗議嚴しかりし爲め、土耳其政府は購入の名義を以て右の二艦を其の黒海艦隊の中へ加へぬ。此の一事は、明かに土耳其が獨逸の同盟關係に在るを證せり。又埃國艦隊は、英佛艦隊の爲めに、アドリヤ海に封鎖せられ、英佛側は、埃國の領海たるダルマシヤ海岸諸島間の水道に機械水雷を布設せり。其の後千九百十五年五月下旬に至り、伊國の對埃開戦後、埃國艦隊は、アドリヤ海より伊國海岸に出動せしにぞ、伊國艦隊及び英艦二隻は之と交戦して敵の小艦三隻を撃沈せり、其の後埃國の潜水艇は、地中海に活動するの形勢ありて、シリ島附近に於て、十月六日、希臘の商船を撃沈し、又同月十七日には、佛國汽船一隻を撃沈せり。

次に黒海に於ける露國艦隊は、千九百十四年十一月十八日、セバストポール沖に於て、土國が先きに獨逸より購入せりと稱せる巡洋艦ゲーベン及びブレスラウと交戦し、ゲーベンは損害を受け、火災を起して遁走せり。千九百十五年一月十八日、露艦側は土耳其の商船數隻を撃沈し、更に同廿四日には、飛行機十六臺を載せたる商船數隻を撃沈し、其後又ブルガリヤ沿岸を砲撃せり。されど、此方面に於ては遂に目覺ましき海戦を見ずして終れり。

## 第七章 獨逸の假裝艦鷗號の活動

### 敵の商船破壊を目的とす

這次世界大戰に當り、獨逸の海軍にては、既にエムデンを始め、海上を横行して敵の通商を妨害せる補助巡洋艦及び巡洋艦多く、何れも奮闘して花々しき効果を奏し、一時世界の耳目を聳動せり。之に對して聯合國側に於ても、極力之が討伐に力めたる結果、遂には獨逸艦隊も自國港以外の海上には影を潛むるに至れり。依つて千九百十五年の末には、聯合國側心を安んじ、今や獨



軍艦は、海上より掃蕩し盡され、歐洲の各海峽地帯は勿論、南北兩米及濠洲間の連絡も凡て安全なり」と誇れり。此に於て獨逸は憤慨甚だしく、尙ほ一たび、其の軍艦を洋上に放ちて、敵の通商船破壊を試みんとの大膽なる計畫を立て、千九百十五年末、其の補助巡洋艦「モエーエ」に此の大任を命ぜり、「モエーエ」とは獨逸語の鷗といふ意味にて、普通商船の如く装ひ、大洋上に遊弋して獲物を漁るには、いと應はしき名稱なれば、以下鷗號として其の活動の次第を叙せん。

鷗號の艦長は、海軍少佐伯爵ドーナにして、其の艦の巧妙なる扮装と艦長の機敏なる行動及び紳士的態度と將た其の艦員の耐忍勇氣とは拔群にして、通商破壊船の模範と賞讃せられたり。

さて此の鷗號は、一見脆弱なる商船の如く装ひ、本國の港を發して、先づ英國海岸に進み、風浪と戦ひつゝ、水雷を布設せり。艦員等は、之を鷗が海中に産卵せりと洒落たるが、實に危険至極なる卵にして、是れに觸れて轟沈せる英國商船少からざりしと言はる。かくて鷗號は、到る處、水雷を沈設し、時には夜間に乗じて、英國海岸の漁船の間を乗り切りて水雷を沈設する事さへありたり。十二日に互つて、豫定の水雷布設を終了せしが、其間たゞの一回も敵艦に遭遇せず、無事に海岸を離れて沖合へ進航せり。

## 二 英船を撃沈す

かくして鷗號は、千九百十六年一月十一日の午前十時、普通汽船航路より約六十哩を離れたる海上に在りしが、忽ち右舷艦首に當りて一筋の煤煙を認めたり。而して其の汽船は次第に接近し來たりしが、此時又も左舷の前方に一筋の煤煙現はれ、見る間に其烟大きくなれり。此に於て鷗艦長は、左右一時に到來せる獲物を兩つながら捕へんものと待構へ、漸く近づくを見れば、其の型體共に英國汽船なるが如し。依つて鷗號は、高く信號を出して、「其は何國の船ぞ」と問へるに、共に英國々旗を掲げ出しぬ。

鷗號は、停船せよとの信號を出し、同時に、獨逸の軍艦旗を高く掲げて假面を脱し、左右兩汽船に向つて各一發の砲彈を送れり。英國汽船は之を見て共に停船したれば、鷗號は左方の汽船に進み行くに、是れ、英國商船フリングフォード號と知られぬ。

此際鷗號にては、先づフリングフォードの船員を自艦に捕虜として收容せる後、急に轉じて右方の汽船を撃沈せんと圖りしが、波浪高くして、フリングフォードの乗員收容に案外多くの時間



を費したれば、此際に右方の汽船は逸走を企て、忽ち濛雨の中に姿を没せり。依つて鷗號はフアリングフォードに數彈を發射して沈没すべき致命傷を與へたる後、直ちに右方に轉じて、彼の逸走船を追跡し、其日の夕方、遙かに其の船影を認め、二時間の後、鷗號は同汽船に追付きしに、是は英國汽船コオブリッチにして、四千噸の石炭を積み、カーヂフよりブラジルへ向ふものなりき。鷗號は、今後二ヶ月の航海を續くべき石炭を得たる事となり、同汽船を隨航せしめて、先刻フアリングフォードを残せる海面に立戻りしに、折りしも明月皎々として海面を照し、全波微風に揺めきて四顧寂寥、フアリングフォードは既に沈没して影もなし。依つてコオブリッチ號をば撃沈せずして、之に乗組員の一半を移し、別働隊となして隨航せしめぬ。

## 第八章 鷗號の奮闘記録

### 商船撃沈の凄慘なる光景

其後二日目、即ち千九百十六年一月十三日の拂曉、鷗艦上の哨兵は、又も「煤煙見ゆ」との報

告を發せり。全員勇み立ちて、遙かに水平線上を凝視せしが、若し彼の汽船にして、無線電信を發するに於ては由々しき大事なるが故、鷗艦は細心の注意を拂ひ、無關心を裝ひ、漸次之に近づきしに、其船には無線の裝置なき事判明せる故、今は心安く、急に獨逸軍艦旗を掲げて幕地に突進せり。彼方の汽船は、殊更知らぬ狀を裝ひて逸走せしかば、鷗艦は逸早く船首前方へ一彈を送りて其膽を奪へり。彼の汽船も、今は鷹に狙はれたる小雀の如く、悄然として其場に停船す。是は英國政府の御用船にして、ドロモンビーと稱し、三千六百噸積、南阿根據地方面に於ける艦船用の石炭輸送途中なりき。依つて其の乗員十五名と石炭をば鷗號に收容せる後、船體をば撃沈せり。愈々爆沈事業は行はれ、僅か數分前迄は渺茫たる大海を我物顔に進行し、烈風強雨を嘲るの威風を示せる大汽船も、一朝にして惡魔の如き獨逸艦に捕はれて、無殘の最期を遂ぐるに至れり。見る／＼重き船體一方に傾斜し、波浪は下甲板より漸次上甲板を包み、やがて音もなく大海の底に吞まれぬ。其時海中より噴騰する大氣泡は暫く續き、短艇、檣、其他の木材器具が、海面に浮流して、災禍を弔ふにも似たり。



「煤煙見ゆ」の信號

さて、鷗艦は、ドロモンビー號を爆沈して間もなく、又も哨兵は「煤煙見ゆ」と報告をなせり。其の汽船も、同じく英國船にして、アーサーと呼べる三千四百九十六噸の巨船なりき。鷗艦は、又も又にも血ぬらずして之を捕獲し、英人十一名、印度人四十五名の乗員を本艦に移し、他に鷄及び鷄卵を多く押収して一同美味に飽けり。

アーサー號を捕獲せる日の夕方に至り、又も南方遙かに煤煙見えたり。依つてアーサー號をば急ぎ爆沈する事となり、餘りに急げる爲、捕獲隊と乗組員を乗せたる短艇は、危機一髪の際を辛くも脱れ得たり。然るに倉皇の際、三個の夜間救命標は、船中に取り残され、水に觸れて自然に發火し、突然燃え上りて、附近一帶に警報を傳へたる形となれり。若し南方より來れる彼の汽船にして、敏く之を認めなば、急に航路を轉せしならんも、鷗艦は早速の氣轉に、船員海中に墜落せし如く見せかけて、浮漂を拾ひ上げしかば、彼の汽船は更に疑ふ色もなく、此方を指して進み來れり。近づき見れば、是れトレーダーと稱する三千七百噸の英國大汽船にして、粗糖を満載

し、リゾーブールに向ふものなりき。十五分間にして此船も爆沈せられ終りぬ。

爆沈、捕獲算なし

其後も、鷗艦は、船舶の往來頻繁なる通路に潛みて獲物を待ちけるが、二日間は一隻の船にも出會はざりき。依つて此の閑暇を利用し、久しく風雨に曝されて汚損せる艦の手入れに取掛りしが、十五日の朝、七時頃、又もや英國汽船アリヤドニと呼ぶ三千噸の巨船を認めたり。依つて直ちに停船を命じて其貨物を分捕り、其の船員をも收容せしが、其時、艦長は此機を利用して實地演習を行はん爲め榴彈を用ゐて之を撃沈する事とし、目標をアリヤドニ號の海圖室と定めぬ。第一彈は見事に命中してアリヤドニ號は物凄き爆音と共に盛んに火焰を吐きて燃え上り、其壯觀に鷗艦員一同我れを忘れて歡呼せしが、同時に大なる危険あるを感ぜり。何となれば此の火焰は遠方より望見し得らるべく、従つて他の聯合側汽船に警戒を與ふる事となればなり。艦長は氣を焦ち、アリヤドニの沈没を今かくと待ち居たれど、火光益々勢を増すばかり、容易に沈没の模様なし。艦長今は待ち切れず、魚雷を一發はなつて止めを刺せしに、流星に其威力驚嘆すべ



きものにして、該汽船は僅か數分にして沈没せり。

かくて海面の渦巻も収まれる頃、又も右舷に當つて煤煙現はれ、其の北方に向けて駛走する速力極めて大なり、鷗艦は最大速力を出して之を追跡せしが、やがて其の英國汽船アッバム號なる事分明せり。該船は七千八百噸の巨船にして旅客用船室及び無線電信の設備ある筈なれば、鷗艦は、直ちに獨逸の軍艦旗を高く掲げて停船信號を發せり。然るにアッバム號は、一向頓着なしに進航を續けければ、鷗艦は、一彈を同船首に送りて威力警告を與へたり。アッバムは之に度膽を抜かれて、見る／＼速力を緩め、やがて停船せり。然れども、同時に無線電信を發せる模様なりしかば、鷗艦長は艦内の電信を以て極力混信せしめぬ。アッバムの電信は之が爲めに無効となりしならんも、既に發信せる以上、附近に在る船舶は、異變あるを感知せる道理なれば、鷗艦長は、即時砲口を英船の電信所に向けしに、彼の無線電信は沈黙せり。此時、アッバムの船尾に在る小速射砲より此方へ向け發射せん様子なれば、鷗艦長も猶豫ならず、忽ち巨砲一發を發せしに、敵砲手等は狼狽して姿を隠せり。艦長は直ちに短艇を下ろして之に赴かしめたるに、アッバムには、獨逸人、男二十名女三名と、他に植民地軍の捕虜八名あり。彼等は敵國の領海に於て、

思ひがけなく自國軍艦の爲めに救はれ、歡天喜地、互に三鞭酒を酌みて幸運を祝せり。

此のアッバム號には重要高價なる貨物多く積まれ、殊に約百萬マルクの現金さへありたり。加ふるに、英國の將校四名、水兵二十名、其他百六十名の乗客ありて、之を殘らず鷗艦に收容する餘地なし。依つて艦長は豫備少尉一名に二十二名の水兵を授けて之をアッバム號に送り、其乗員一同を監督せしめたり。

## 第九章 鷗艦縱橫無盡の威力

健氣なる英國老船長

翌くれば十六日の午後、又も海上遙かに煤煙を認め、漸く近づけば、可なりの速力を有する大汽船なりき。鷗艦は全力もて之を追跡せしに、彼の船も必死に遁走せし爲め、之に追付ける時には既に夜に入り、四面暗黒にして旗旒信號用を爲さず、依つて信號燈を以て其の船名を問ひしに、彼の船よりは折返して「先づ汝の船名を名乗れ」と詰問せり。鷗艦は出任せに、最近撃沈せ



る英國汽船アーサーの名を示せしに、彼の船は遂に「克蘭・マクタギシ」と名乗れり。是にて英國汽船なる事判明したれば、鷗艦は忽ち假面を脱して「我れは獨逸の巡洋艦なり、汝直ちに停船せよ」と信號せしに、英船は此時四百米の近距離に在りて、尙ほ全速力を續け、頻りに無線電信を發せり。鷗艦、今は猶豫しがたく、其の船橋目がけて一榴弾を送りしかば、英船忽ち辟易して其の送電を停止せりと思ふ間もなく、突如英船より一大閃光發し、同時に鷗艦上を掠めて飛來せるものあり。一同英船の大膽に呆れしが、其中第二彈又も飛來して鷗の左舷近くに落下せり。鷗艦員今は容赦するの要なしとて、直ちに速射砲の火蓋を切りしに、僅か三百米の近距離なるが故に、命中又命中、殆んど空彈なく、英船も頻りに應砲せしも、一彈も獨艦に命中せざりき。其中英船の速力は次第に衰へ、遂に發砲も止み、間もなく蒙々たる硝煙の間より「我れは萬事を停止せり」との燈信を送り來れり。此の小戦に、英船の死者十八名傷者五名を出し、船體の損害多大なりし爲め、頑強なる船長も遂に屈服せるなりき。此の英船は五千八百十六噸の巨船にて、濠洲より羊毛、皮革、護謨等の高價なる貨物を約一億マルク程載せ來れるなりき。鷗艦は、此の場合、是程の貨物を本國に持歸るの術もなく、且つ英船は已に無線電信を發せるなれば、

今にも英國軍艦の救援に來たる虞れあり、一刻も早く此場を立去らんと決心せり。依つて英船員を收容し、其の一億マルクの財寶をば船體諸共撃沈せり。それより鷗艦長は英船長を呼び、其の不法抵抗を詰りしに、英船長は之に答へて曰く「余は貴艦をば最初獨逸巡洋艦と信ぜず、唯だ假商船ならんと思ひ、互角の戦鬪をなさんと決心せるなり。余は個人として何等の責任もなし。唯だ我が英本國政府の命にて本船を英國に回航すべき任務を執れり。而して政府は、其目的の遂行するの用として特に一門の大砲を付與されり。余は政府の命令を實行せんが爲めに、其大砲を使用するを當然の任務と信せるなり」と、鷗艦長は、此の老船長の明白率直なる言辭を壯なりとし、緊と其手を握りて曰く、若し余をして貴下の地位に在らしめば、余も亦貴下と同一の手段を取れるならん」と。

月色冴えて波白し

克蘭・マクタギシ號撃沈の後、鷗艦は、アップラムを隨伴船として、更に西方に進航せり。既に此時迄撃沈せる英國汽船七隻に及び、其收容人員多數なれば、鷗艦長は、アップラム船に今迄の



俘虜全部を移乗せしめ、ベルク少尉に一隊の水兵を授けて之を監督せしめ、大西洋を横断して合衆國に向はしめたり。一ヶ月後無線電信に依り、アバム號が途中無事、豫定通り、北米合衆國のニューポート・ニュースに入港せりとの報あり。之を聞ける鷗艦員は歡呼して其の成功を賀し、且、是に依つて鷗艦の秘密行動が依然安全なる事を確め得たり。

兎角する中、鷗艦は石炭缺乏しければ、最初の捕獲船コオブリッチと會合せんが爲めに、指定の地點に向ふ事となれり。されば、コオブリッチ號は、一月十二日捕獲後、直ちに捕獲隊指揮の下に、或る地點に派遣せるものにして、既に其地に達し居たる筈なれば、鷗艦は、其の石炭を取らん爲め、其處に赴けるなり。かくて一月二十日鷗艦は熱帶圈に入りしに、此日、一隻の三檣帆船に出會へり。是れ、エジンバラと呼べる英船にして、千四百七十三噸なり。其任務は、印度よりリゾブルに輸送すべき二千噸の飼料用米粉を搭載し、二十一月間海上に漂泊し居たるものにして、大西洋に入りて後も、既に兩回歸線間の無風帯に數ヶ月漂流し、灼くが如き炎天下に風を待ち暮らせる中、此度漸く微風を得て出帆せんとする處を、鷗艦に發見せられたるなり。鷗艦は難なく之を捕へて撃沈せんとせしが、米粉を爆發藥の上に載せたる爲め、火焰は檣より

りも高く騰り、船體徐々に傾斜し、帆桁を高く水面に突出し、やがて船尾より沈み行けり。折りしも月色高く冴えて波は白く、光景一層壯觀を添へたり。

鷗艦が豫定地點に達せるは、一月二十八日なりしが、其處にてコオブリッチ船より石炭を取る爲めに三日を費し、終つて同船を撃沈せり。

### 敵艦に搜索せらるゝ運命

石炭の供給十分となり、鷗艦は長期の航海に堪ふる事となりたれば、艦員一同頗る元氣つき、勇躍して又も大海に乗り出せり。然るに既に四日に及んで、一隻の敵船にも出會はざりしかば、そろく不安の念を生じ、或ひは敵の爲めに形跡を疑はれたるに非ずやと考へ、依つて此度は、一層困難なる航路に入れり。かくて二月四日、一隻の汽船を捕獲せり。是れ、白耳義のリュクサンブルと呼ぶ四千三百二十一噸の巨船にして、或る英國鐵會社に送るべき石炭五千九百噸を積み。鷗艦は直ちに之を捕へて、其船員を自艦に收容し、船體は石炭と共に海中に射ち沈めぬ。然るに此船の乗員は、大半中立國民にして、特に希臘人と西班牙人と多く、彼等がマンドリ



ン、六絃琴、猿、犬などを抱へて鷗艇に移り来る様は、いと奇異の光景なれば、艦員は無聊の海上生活に此の珍客を得て、頗る旅情を慰めたり。

二月六日、鷗艦は、英國汽船フラメンコ（四千六百二十九噸）を發見し、停船を命じたるに、英船は無線電信を發して救助を求めたり。鷗艦は急に數發の榴彈を發射せしかば、英船は見る見る燃え上り、其船員は周章狼狽、短艇を下して我先きにと逃げ出し、爲めに一艘の短艇は顛覆して二十人餘りの乗員海中に陥れり。然るに此の近海は、大鯨の棲所にして、甚だ危険なりしが、幸にして救助せられ、唯だ一人の溺死者と一人の行衛不明者を出せり。恐らく彼れは、大鯨の餌食となりしならん。鯨は鋭敏なる嗅覺を有する故、容易に其の好餌をさがしあつると言はる。其の間にフラメンコ號は、刻一刻、海底に沈下せしが、其間鷗艦長は、其の船長を引見し、其の妄りに無線電信を使用せるの舉動を難詰せしに、船長は之に答へて、「余が全力を盡して敵艦の計畫を妨げんと努むるは、是れ貴艦が我が船を捕獲せんと努むると同じく、當然自己の義務なり」と辯解せり。

さて鷗艦が此際收容せる俘虜の中に、一人の中立國人ありて、其の證言に依り、鷗艦が目下

敵艦の爲に追跡せられ居る事判明せり。現に英國巡洋艦グラスゴーは、一日前フラメンコ號に出會ひ、獨逸の軍艦が此近海に徘徊するが故に、注意せよと警告せりとの事なりき。鷗艦員は之を聞きて漸く凝懼の念萌し、此上は疾く他の領海へ鞍替へせては叶ふまじと協議を凝らせり。

## 第十章 鷗號の大成功

### 西班牙領海への冒険

さて鷗艦は、長く同一の地點に停まることの不利なるを考へ、フラメンコ號撃沈の後、再び進航を續け、行く行く敵汽船を搜索せり。此の日天氣快晴にして、暑熱堪へがたく、終日四方を展望せしも、一諾威汽船を認めたるのみ。是は勿論中立國の船なれば、何等手を下すべきものにあらず、唯だ自艦の處在をくらすのみなりき。然るに其の日の夕方、前方遙かに一煤煙を認めれば、好き獲物よと直ちに艦を其方面に轉じ、急速力にて追蹶せしが、漸く其の船側に近づける時には、四面全く暗黒となり、燈信を以て其の船名船籍を詰問せしに、しばらく躊躇せる後、ヘラ



クライドと答へぬ。されど、ロイド汽船名簿には、同名の汽船なく、當然偽名なる事明白なれば、  
鷗艦にては、更に詰問し、国籍を示せと迫りしに、單に友邦とのみ曖昧の答へなりき。此に於て  
鷗艦長は汽動艇を下ろさん爲めに速力を緩めたる間に、彼の船は、突如速力を早めて遁走せんと  
せり。今は猶豫すべきに非ずと、轟然一發榴弾を浴びせしに、汽船も今は助からずと觀念し、汽  
笛を鳴らして停船せる旨を報せり。

此に於て、鷗艦は其の船尾を檢照せしに、ウエストバーンと稱する英國汽船なる事判明せり。  
こは三千三百噸の老朽船にして、石炭を搭載し、其速力も僅か七哩なれば、一旦敵艦の視界に入  
りては、到底遁走し得べきものにあらざりしなり。依つて、鷗艦長は、其の乗員を我艦に收容  
し、船體をば撃沈する事とせしが、收容未だ終らぬ中、又も水平線上遙かに一つの白光を認め  
れば、急に短艇を引揚げウエストバーンをば、其儘艦尾に隨行せさせ、此の新たなる獲物を追跡  
しつ、夜の明くるを待てり。其中東天漸く白み、翌くれば二月七日の朝まだき、此の新らしき獲  
物は、英國汽船ホールレスなる事判明せり。是は三千三百三十五噸積みにして、酒類、穀物、羊毛、  
肉及びアンチモニーなど、目下獨逸にて最も缺乏せる高價の品々を積み。之を本國に送りたき

は山々なれど、同船には、石炭少き爲、之を送る事も叶はず、止むなく其の乗員のみを收容して  
船體をば撃沈せり。然るに、斯く一時に多數の人員を收容せる爲め、艦内狹隘を感じるに至りし  
かば、其の百八十人をば、老船ウエストバーンに移し、之をテネリツフ島へ移送する事とせり。  
此間の航海は餘り愉快なるものにはあらねど、彼等百八十人は、鷗艦を退去し得たるを喜べり。  
そは、彼等が従來居室に充てられたるは鷗艦内の裝填室にして、設備悪しかりしのみならず、  
鷗艦が敵船を砲撃する際には、時々彈丸其室に飛來する危険ありたればなり。

やがて、獨逸士官監督の下に、ウエストバーンは、千九百十六年二月二十二日、テネリツフ島の  
サンタクロス沖に達せり。此折、英國の大裝甲巡洋艦サトレツチ號は、一萬二千噸の巨體を同港  
に横へ居たりしが、白晝ウエストバーンが入港するをも氣付かぬ體なれば、同船は仕合せよしと  
逸早く西班牙領海に入り、急に獨逸の軍艦旗を掲げて堂々と進み行けり。されど今は英艦も手  
下すべき餘地なく坐して之を眺むるのみなりき。

かくしてウエストバーンは、何等妨害も受くることなく、揚々と入港投錨し、翌朝に至り、乗  
員の一部をば上陸せしめ、他の一部をば英國船に引渡せり。午後に至り、ウエストバーンは出港



する事となりしが、港外には、英艦サトレツヂ待構へ居たれば、當然其の捕獲を免れじと思はれしに、豈圖らんや、ウエストバーンは、港口を出づると間もなく、突然白煙濛々と起り、船は一瞬にして沈没し、乗組獨逸人等は、素早短艇に乗り移りて脱れたり。同地新聞紙上には、同船爆発の原因を汽罐の破裂に歸したれど、同船には四千噸の石炭を積みあり、之を英艦に捕獲せらるゝを忌み、乗員等が態と爆発せしめたるなりとも言ひ傳へぬ。

### 無線電信の吉報

一方、鷗艦は、前日ウエストバーンを送り出せる後、又も征途に上りしが、翌日に至り、前方に一汽船を認め、追跡四時間の後、漸く之に近づきしも、既に夜に入りたれば、探照燈を以て之を検せしに、其は或る中立國船なりき。鷗艦は折悪しと見て、逸早く闇に姿を隠して其場を去れり。次に出會へるは、大なる一旅客船なりしが、之を撃沈せんが爲めには、先づ其旅客を收容すべき随伴船を要する故、止むなく之を見遁せり。其後數日、鷗艦は、交通頻繁なる海上に出て、獲物を待ちしが、遂に一船影をも認めざりき。是は、英國の警戒日を遯うて嚴重となり、其の情

報機關、手落なく活動せる結果と知られぬ。

折柄日に増し春季模様となり、冬時の暴風期も過ぎたれば、聯合國側の艦隊は、一齊出動して鷗艦を搜索する事となるべく、是が爲に捕獲せらるゝの虞れありて、又前日の如き縦横無盡の活動も不可能なるが故に鷗艦は獲物もなき危険なる海上に曝露するを愚なりとし、徐かに歸國の準備に取掛れり。而して緯度が北に移るにつれ、鷗艦は、獨逸新聞の無線電信に依りて、本國より種々なる吉報に接せり。特に鷗艦乗員五十名が、鐵十字章を授けられたりとの無線電信は、最も一行を喜ばせぬ。斯くて二月廿四日に至り、鷗艦は更に一個の獲物を加へたり。そは佛國汽船マロニ號にて、三千百〇九噸積、雜貨を載せてボルドーより紐育へ赴く途中なりき。鷗艦は直ちに追つて之を捕獲し、三十三名の佛國人を收容し、船體を検するに、船底に百箱の三鞭酒を藏し、上艙には多數の鶏卵と良質の佛國製乾酪其他の嗜好品夥しく藏せり。上艙の物は、全部取り移したれど、船底の三鞭酒は取出す暇もなく、其儘船體を撃沈せり。

### 快心すべき新聞記事



此際鷗艦にては、マロニ號より種々の新聞紙を得て一同耽讀せしが、其中に、鷗艦の行動を憤懣せる記事ありて、之を一般海賊船と異なるなしと論ぜり。鷗艦員等は、之を讀みて、敵國商船破壊事業が大なる成功を収めたるの證左なりとして喜べり。其後鷗艦は北航歸國の途中、最後の獲物として、英國汽船サキソン・プリンス(三千四百七十噸)を撃沈せり。同船は、棉花、穀物、爆發藥原料等を載せ、米國より英國に歸る途中なりき。同船より得たる英米新聞の記事は、鷗艦員に取つて快心のもの多かりき。又此記事に依りて、前日、鷗艦が米國に移送せる捕獲船アッパム其後の消息を詳知する事を得たり。即ちアッパム號は、彼の折り、英國人及中立國民を載せて豫定の如く、北米海岸に近づきしに、其處には、無線電信を傍受せる英國巡洋艦數隻が、疾くも待構へ居たり。依つてアッパム指揮の任を取れるベルク少尉は、種々苦心の結果、漸く是等敵艦の目を遁れ、二月十五日、豫定通り、獨逸軍艦旗を翻へして、突如ニューボード・ニュース港内に進めり。之を見たる米國海岸の哨兵も、其の餘りに意外なるに一驚を喫せり。

勿論アッパム號には、數百の英國人收容せられ居たるも、獨逸兵擲彈を携帶して嚴重に之を見張れるが故に、米國官憲も是を如何に處置すべきかを知らず、或はベルク少尉を無視して、英船長ハリソンを船長と認むべしと主張するもあり。英國領事も談判の席に列せしが、ベルク少尉は飽迄己れ此船の主權者なりと主張して、英領事を舐側より追ひ返せり。遂には、米國政府もベルク少尉の主張を承認する事となり、船中の英國人と中立國人とは、翌日直ちに解放せられしが、さてアッパム船には獨逸人居残りたるが故に、之を捕獲船と認むべきか、將た軍艦と認むべきかに就き異論起り、遂に米國政府は、英領事の抗議を排して、之を捕獲船と認めぬ。以上の事實は、鷗艦が今回捕獲せる英國汽船より押收せる新聞紙に依りて始めて艦員一同が知る處となりしなれば、一同は此吉報を讀みて勇躍し、各々其の成功を祝せり。されど、アッパム號が、ノオフォークに着せる後は、英國海軍省に於て、鷗艦の搜索に全力を盡せる様子なるが故に、一行の運命今や危殆に瀕せる事明白となれり。依つて鷗艦は、一層警戒を加へ、一日も早く本國に歸るに決し、又もや北海を横斷して設備せる、敵の封鎖線を突破するに決せり。

英艦の警戒を突破して歸國す

鷗艦は、今や進んで、英國の海上封鎖第一線に僅か廿四時間航程の海上に達せり。艦内に在る



英人俘虜は、此船が英國軍艦の爲に捕獲せらるべきを思つて、賭けを試みなどせり。時は二月廿八日、鷗艦は、英國哨艦の煤煙の間を徐々に進行せり。此日、天氣晴朗、青空纖塵なく、午前には、巨大なる一諾威帆船に出會へるのみ。午後に至りて、次第に風強くなり、遂に暴風と變じ、艦體は怒濤に揉まれて甚だしく動搖し、加ふるに朔風亂雪を捲いて寒氣骨を刺せり。久しく熱帯洋上に在りし艦員等は、氣温の激變に苦みしも、何れも元氣よく其の任務に就けり。夜に入りて、風稍風ぎ、而も順風なれば鷗艦は全速力にて進航せり。時に忽ち無線電信の感受ありて、艦は今全然敵哨艦の警備圈内に在る事分明せり。されど、敵の艦影は更に見えざりき。やがて、英國及びスカンジネキヤ諸國間の頻繁なる海路交通を證明する無数の煤煙中に、一團の船隊見えたれば、是れこそ英國驅逐艦隊ならめとて、一同戦々競々たりき。若し此の驅逐艦隊の爲に發見せらるゝに於ては、鷗艦は釜中の魚となりしならんも、幸ひ、敵の視線を免れ、翌朝東天の白む頃、遙かに、白雪に蔽はれたる諾威の海岸を望み得たり。一同歡呼して一層速力を早め、やがて前方に獨逸水雷艇の煤煙を認めれば、一同始めて敵地を脱して故郷に辿り着ける心地なり。兎角する中、無線電信通報に依り、獨逸の軍艦數多來り合して鷗艦を警護し、鷗艦は多大の成功

收め、滿艦飾を施せる身方の諸艦隊に迎へられて故國の軍港に投錨せり。



昭和三年三月十七日印刷  
昭和三年三月廿日發行

通俗世界全史第十六卷  
二十世紀史(上卷)

編輯兼  
發行者

早稻田大學出版部

代表者

東京府豐多摩郡  
戸塚町下戸塚五十八番地  
種村宗八

不許  
複製

東京市牛込區櫻町七番地

印刷者

竹内喜太郎

東京市牛込區早稻田

發行所

早稻田大學出版部

(振替 東京一三四三  
名古屋二三四三)

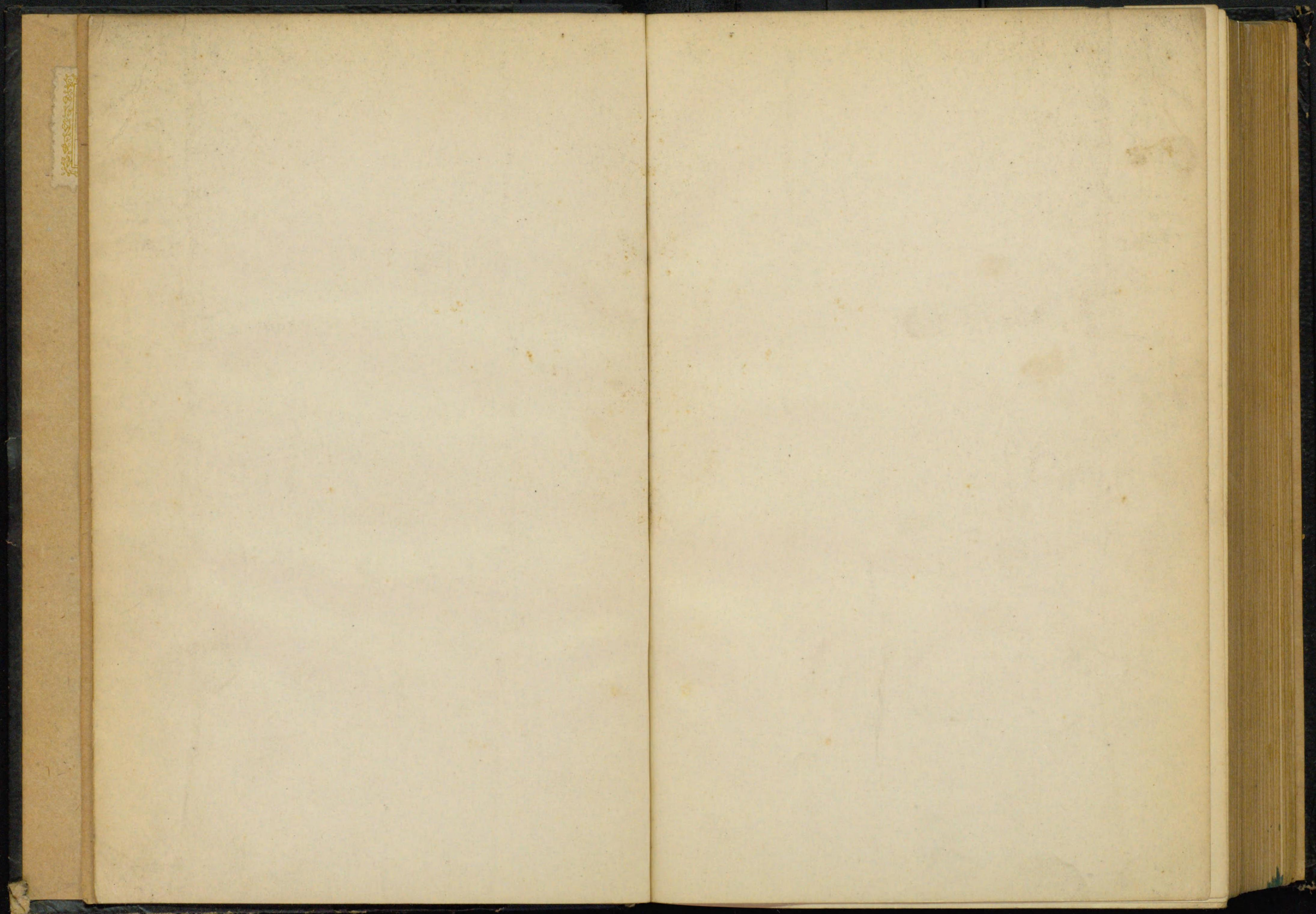
日清印刷株式會社印刷



Small decorative label on the left edge of the left page.

Faint, illegible text or markings on the right page, possibly bleed-through from the reverse side.







5  
15



556  
153



